

# 踏み鋤の二系列

——やゝ用具論的に——

中 村 俊 亀 智

## 目 次

一 まえがき	
二 スキ	
1 岩手のスキ	二七二頁
2 魚沼のスキ	二七七頁
3 木曾のスキ	二八二頁
三 柄鋤	
1 多摩のエンガラ	二八七頁
2 秩父のムグリ	二九四頁
3 下間仁田のイングラ	三〇二頁
4 改良型	三〇六頁
四 あとがき	

## 一、まえがき

鋤には形態的に大きくわけて二つの型が考えられる。一つは柄と台(刃を据える部分、床)とがほぼまっすぐ続いて  
いる型、もう一つは柄に対して台がくの字型に折れまがって接している型である。私たちは前の型を權状の鋤(舟の權  
のような形の鋤)、後の型の鋤を「踏み鋤」と呼びならわしている。なお、ここでの鋤とは、操作上、土を向こう側へ掘り

返えず用具、鋸ノコギリとは、逆に、土を手前方へ掘りおこす用具と定義しよう。

ところで、これまで踏み鋸については、すくなくとも、次のようなことが明らかである。

一、踏み鋸は、形の上からも、二つの系列にわけられること。

二、第一の系列は、柄と台とがひとつづぎの木の枝からとってあり、青森・岩手・北海道の一部と、新潟県の南魚沼地方、長野県の北部、それに木曾御嶽山麓の四つの地域に分布していること。これらは単にスキと呼ばれていること。

三、第二の系列は関東地方で柄鋸ノコギリ、鋸ノコギリ、踏み鋸などと呼ばれているもので、たいらな板の台に長いまっすぐな柄を取りつけたもの。これには東京、埼玉、群馬、栃木、茨城各県の一郡と、三浦半島の南半分、千葉県君津市亀山地域の三つの分布領域が確かめられること。

四、これらの鋸は、ムギヤヒエ・アワ、そのほかイモ、大根類の栽培の用具として、かつてはひろく用いられていたらしいこと。

それなら、この二つの系列、すなわちスキ系列と柄鋸系列とは、単に形が違い、その広がり異なるだけなのだろうか。詳しくみてゆけば使い途や使い方の上で、あるいはそれにつらなる生産なり生活なりの進め方考え方において、あるいは、スキ系列同志、柄鋸系列同志のなかで、何か違いがみられるのではなからうか。この小文はこの点を確かめ、そして、掘り上げてみたものである。

一般に、特定の用途に供される道具のことを「用具」といっているが、私たちはそのような用具において、「特定の用途」ということと道具の形や作りとがどう対応しあうか、関係しあうか、結びつくかをそのものに即して分析してゆこうとする。そのため、ここでもまた、(1)ものそれ自体の形を正確につかむため出来るだけ三面図を作り、(2)ものの各

部分相互のつながりを構造化し、(3)用具がどのような仕事のどの部面(これを作業といっている)で使われるか、(4)用具を使いこなすためにはどのような操作・うごき、がなされるか、そのためにはある型が出来上っているか否か、(5)標準的な仕事量はどれほどが目標とされているか、(6)用具はその仲間次第で使い途やうごき、仕事量が変わってくるが、ある用具にはどのような用具が対になるか、(7)鋤の場合、どのような土の所、地形の所が選ばれるか、(8)作りや形は作る人、作る所によって細かい違いがあるかどうか、(9)その用具が現代まで使われていたとしたら、それが現代にのこるだけの利点はどこにあったか。また欠点は何で、それはどう克服されたか。(10)現在使われていないとすれば、何時、何に置きかえられたか、置きかえによってどのような利点や欠点が生じたか、仕事の進め方にはどのような変化が生まれたか、等々の諸点に注意した。

懇切な御教示を給った高橋九一、貝瀬幸咲、橋本信左、橋本よね、稲垣カツ、野島厚之、加藤秀雄、加藤正市、千島堅三、関根千代吉、山口富一、阪本秋太郎、高山半平、金沢佐吉、岩手県農業試験所の古沢典夫、中野信夫、新潟県農業試験所の内山昭三、長野県農業試験所の梅村弘、東京都農業試験所の柴英雄、群馬県農業試験所の斉藤恵亮諸先生、調査に多大の便宜をお与え下さった岩手県立農業博物館の西堀幸次郎、遠藤春光、開田村公民館の中畑文司、下島万夫、多摩郷土研究会の浅井徳正、秩父小林コレクションの小林抛英、小林茂、大滝村公民館の横田猪作、千島敬次郎、群馬県立博物館の池田秀夫、阪本英一、文化庁の大島暁雄諸先生に心からお礼を申し上げたいと思う。

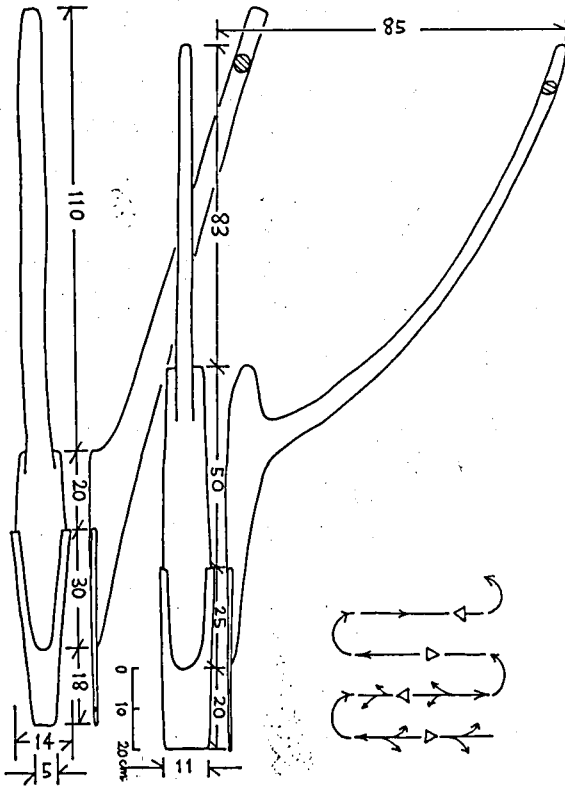
なお、話をしていただけ明らかなったこと、議論の結果確められた点は、小文ではいずれも他の引用と同じよう、カッコにおさめたが、これらは私の聞き書きによるもので、その点、きき違い、とり違い、書き違いをおそれる。誤りは訂正していただければと考える。なおまた、岩手のスキについては高橋九一先生、木曾御獄のスキについては向山雅重先生の御報告があるので、この二つについては全面的に両先生の御報告をもとにしてすすめることにした。

## 一、ス キ

## 1 岩手のスキ 岩手県岩手郡滝沢村岩手県農業博物館

一、かたち 岩手県立農業博物館には、これまでに県内各地域のスキが七例ほど集められている。いま柄の頭から床におろした垂線の長さを仮にこのスキのタテ、刃先からはば垂線の足までの長さをヨコとすると、これら岩手のスキには、タテもヨコも両方とも大きい普代の型、ヨコの割りにタテの値が大きい北上東側（普代・岩泉・葛巻）の型、それにヨコに比べてタテの値の低い北上西側（岩手村・遠野・矢巾）の型などがあるようにも思われる。しかし、「柄（台も）はイタヤやナラを使う。これは山から適当なものを自分で見つけて作るのだから、曲りの少ないものや大きく曲ったものなど、持つ人によって皆違うことになる」<sup>1)</sup>。もっとも「エガラ（柄）の適当な角度は、先端が帯をする腰の高さが最もよく、やや下向きに彎曲しているのが使いやすいとされている」<sup>1)</sup>。地域による差は刃の形態ではもっとはっきりしていて、「鋤や鍬・鎌は町や村の野鍛冶がつくった。福岡町川又の野辺地さんは、鋤の定法は、幅四寸から四寸二分、刃先八寸から八寸五分、柄台八寸という。これは普通の鋤の大きさであるが、北上山脈を越した隣郡九戸村のものは幅が三寸八分だという。畦を小さめにつくるからである」<sup>1)</sup>。このすきのはの様子を比べあわせてみたのが第一図である。この図によれば北上の東側の普代や葛巻の鋤は全体として細身で、反対に北上の西側では幅の広いすきのはが使われていたのではないかとうけとれる。

二、うごき それなら岩手のスキはどのようにして操作するのか。「これを踏む場合は畦の頂点を中心に土を左右に掘りわけるのである」<sup>1)</sup>。「畑は大低傾斜しているので、裾の低い方から高い方へ後退しながら踏む。数人並んで踏む場合は、熟練した者が先になる」<sup>1)</sup>。スキの掘り進み方には現実には二つの型がみられる。前に進んでゆく型と後ずさりにさが



第一図 岩手県北部のスキ  
 上は岩泉、下は遠野。いずれも岩手県立農業博物館蔵。図の右上はこのスキの使い方を示す。矢印は進行方向、または、土を掘りおこす方向、△は身体の向き、縦線は掘りおこしたミゾを表わす。以下の図もこれは同じ。

つて、ゆく型とである。岩手のスキはそのうちの後ずさり型である。また、土の掘りおこし（土を返すという）方にも二つの型がある。一つは掘り上げた土を今掘っているみぞの片側だけにあげてゆくやり方、もう一つはひとすきごととに右・左・右・左というように、土をみぞの両側にあげてゆく型である。岩手のスキはそのうちの両側おこし型のうごきをともなう。そのうごきをやや詳しく追ってみると、

- ① 「土を左側に反転させるには右足でスキを踏み」<sup>(1)</sup>
- ② 「右手で柄の中ほどを支える」<sup>(1)</sup>。右手は手首を返し甲が下、掌が上に向くようにして柄を下から支える。
- ③ 左手は柄の先（頭）を握る。手首を曲げずに甲が外側に向くようにして横から柄を握る。肘は上に曲げて。
- ④ 身体をやや左に開き、右足に力をかけて、スキを土に踏みいれる。腿はたいらになるくらいにして、
- ⑤ 踏み込んだ後、左足を曲げ、身体を沈め、かけていた右足がまっすぐのびるくらいまで踏みいれる。
- ⑥ そして、すこしスキを持ちあげ、「さらにもう一度踏み込むと二〇センチ位の深さに掘ることができる」<sup>(1)</sup>。
- ⑦ かけていた右の足ははずし、体を左に開いたまま、「鋤先で土をゆすぶりながら左側に反転し」<sup>(1)</sup>。台の元の所を支点にして、ひよいとはねあげる要領で土を掘り上げる。
- ⑧ かけていた右足を左足の後まで引き、身体の向きをかえ、
- ⑨ 「小股で二歩後退し、右肩に移した左柄の先端を持ち」<sup>(1)</sup>「左足で鋤を踏み土を右側に反転する。小股で二歩後退することによって鋤の刃先位置、角度が自ら適当に定まるのである。以上の動作がリズムカルに行われることが大事で、ここが熟練を要する点である」<sup>(1)(2)</sup>。

こうして畑のはしまでひとねおこしてしまおうと、そこでユーターンし、また同じようにしてもどってくる。スキの掘り進み方には畑のはしまでいって、行きと同じように掘りながらもどってくる型と、帰りは掘らずにもどる一方交通型

とがあるが、岩手のスキの進み方は前者なのである。「明治生れの人なら一日一反歩、今の人は一日五畝歩が標準となっている」<sup>(1)</sup>。そして「鋤は体重を利用して足で踏むので二〇センチ位までの深耕ができる上に、鍬を使うときの様に極度に腰をまげる必要はない」<sup>(2)</sup>。踏んでいるとき、前からみていると⑦のうごきでの腰のまげ具合は身体の中心に対して四〇度左にまげる程度であることがわかる。

三、畑・つち 「鋤は稗を栽培する県北地方特有の道具である」<sup>(1)</sup>。「稗畑を耕すことを、この地方では鋤踏みという」<sup>(2)</sup>。

「岩手の畑作は南北二つの型に分けられる」<sup>(3)</sup>。県の南の比較的あたたかい地方ではムギとマメとの組合せで一年二作型の畑作が行われている。この地帯では一〇月から一月にかけてオオムギを播き、次の年の六月とりいれ、その後同じ畑にマメを播く。県の北の寒冷な日照のすくない地方ではヒエ・ムギ・大豆の二年三作型の畑作が行われている。三作型の地帯では、四月の末から五月にかけ、

- (1) つけてあったマメのウネをスキでくずし、土をもとのみぞへ小盛りにする。
- (2) くずした所へ肥料をいれ、
- (3) シャクシという板鍬で筋をつけ、
- (4) そこへヒエの種を播く。
- (5) その上をシャクシで覆土する。または足で土をかける<sup>(2)</sup>。

九月中頃、ヒエのウネをくずし、みぞへ土を盛り、ムギを播き、次の年の七月ムギを刈る。そのムギのウネの肩のところにマメを植える。一般に鋤にはみぞ掘りや畑の天地返しなどの役目があるけれども、岩手のスキは専らウネくずしのために使われる。そうした畑のうちで「鋤を使うに不適當な畑は、表土の浅いところ、石礫の多いところ、湿地の甚しい所である」<sup>(1)</sup>。土は「軽い火山灰土が殆んどなので、冬季間の凍害と春の乾燥」にみまわれる。ときには「風に土が飛



されると、種子と肥料だけが残ることがある<sup>(1)</sup>。「これを防ぐために畑にウツギを植えて防風林をつくる。これをクネと<sup>(1)</sup>いっている」。県の北のスキ地帯のこうした土壌を、葛巻や岩手町ではクロボクという。比重七〇前後の軽い、そして透水性通気性に富み比較的腐植のある、土性的には壤土の場所である<sup>(4)</sup>。

四、スキ以後 岩手のスキが使われなくなったのは六〇年代に入ってからである。ヒエの作付面積は五九年には一三三〇〇アールであったが七〇年にはその一八%<sup>(5)</sup>で、曾ってのヒエ畑には今では牧草やホップが作られているという。「昭和三〇年頃までの畑ヒエは、大麦・大豆と二年三毛作の輪作体系で一戸当りでは四五—八五アール位(馬一、二頭分)の面積が多かった。(中略)基肥として堆肥八〇〇キロ位のほか、硫酸八—一五キロ、過石二五キロ、木灰若干、人糞尿二五〇—四〇〇キロを加えたいわゆるポツタ播ぎが殆んどで、追肥は硫酸八キロ位が一般であった<sup>(5)</sup>。この畑作で「注目すべき点としては大家畜(主として耕馬)との結び付きが強いことで、子実は主食と濃厚飼料として重要なこととは勿論、稗は粗飼料および敷料として重要な役割を果していた<sup>(5)</sup>」。「このように、食・飼料としての機能、小肥瘠薄地適応性、安定性、省力粗放性、輪作上の有利性などから、ヒエは主穀式自給的畑経営における代表的作物であった。とくに大凶作をくり返してきた藩制時代においては、ヒエは水田作、畑作を問わず自給本能、生存本能に基づく重要な作物であった<sup>(5)</sup>」。「ヒエの近年の衰退の理由としては、米作の選択的拡大と稲作技術の高度化による米の安定多収で、まず主食としての意義を失った。次いで商品生産農業の展開によって縮小品目に落ちこんだ。そして、モーターゼイションによる馬産(耕挽馬)の消滅によって遂にその存在価値を失ったかと思われるのである<sup>(5)</sup>」。

註

花輪の場合。

(1) 高橋九一先生「種つくりの民具」(民具マンスリー三ノ

九)による。

(3) 同試験所の古沢典夫先生による。

(4) 同試験所の中野信夫先生による。

(2) 岩手県農業試験所の方々による。たゞし、これは宮古市

(5) 同試験所「補完的省力作物導入による休耕田解消」(同

## 2 魚沼のスキ 新潟県南魚沼郡六日町上薬師堂

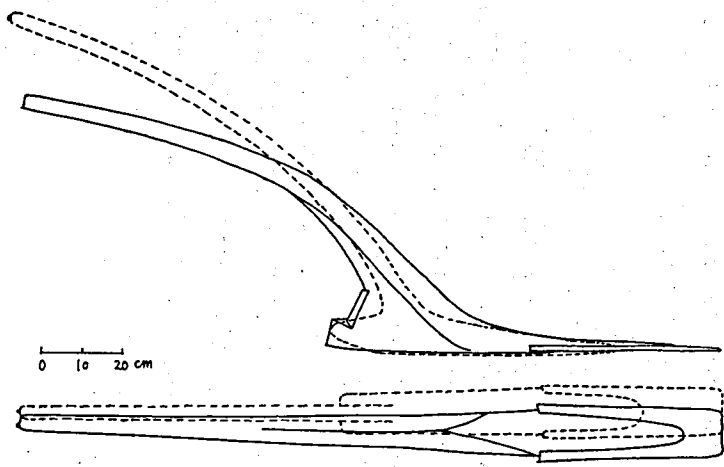
一、かたち 魚沼のスキには新旧二つの型がある。古い型は在来型、新しい型はその改良型である。その在来型をさきの岩手のスキに重ね合せてみると第二図のようになる。この図によれば、床から柄の頭までの高さは岩手のスキが魚沼のスキよりすこし高く、反対に柄の分れ目や柄の太さ自体は魚沼のスキが岩手のスキよりもすこし太いことがわかる。しかし、ヨコの値はほとんど一致してしまい、この二つのスキが形の上でよく似ていることが確かめられる。これに対し改良型は、第三図のように、長さほぼ一メートル、幅一四センチの台の先きに長さ四六センチ、幅一二センチの刃を据え、また元から一五センチの辺りから柄をとりつけたもので、台は先ほど薄く、上からみると杓子のようにまんなかがふくらんでいるのが極めて特徴的である。そして台の元は足がかげやすいよう斜めにそいである。刃は先の平の部分<sup>ひら</sup>が短かく、多分これは打物(鍛造)かと思われる。柄は手元の方がまるく、先ほど角ばっていて、台への接合部分では四に七センチの矩形の断面で、通しホゾで台に接合されている。柄はかなり彎曲<sup>まが</sup>していて、「柄の頭がちょうどヘソの辺にくるのが使いやすい」。それなら新しい型は古い型をどのように改良したか、それをみたのが第四図である。この図によれば、改良型は在来型より台の長さが(在来型の台の長さの一割程度)長くなっていて、柄はそれ分台の後方にさがり、しかも、柄の高さはそれほど変わっていないことがわかる。

二、うごき 改良型で土を左側に返そうとする場合、「右手と右足が先に出る」。

① 右手で柄のまんなかからすこし上の辺りを持ち

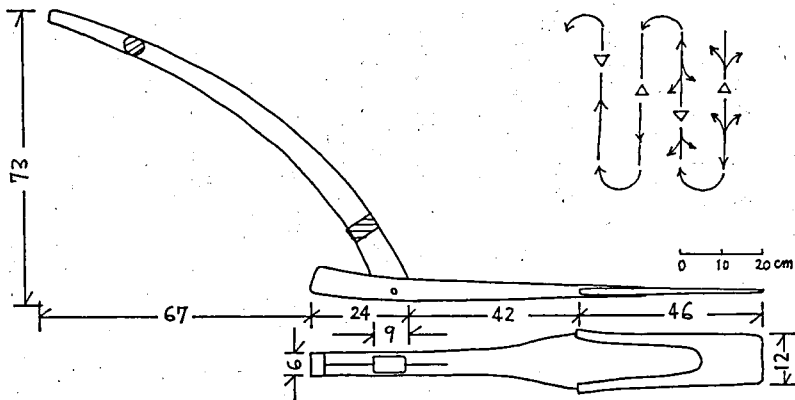
② 左手は、肘をはって、柄の一番頭のところを握る。両手とも手首をのばし、甲は上側にむけて。

③ 右足を前、左足を後にして(引いた左足がうごきの軸になる)

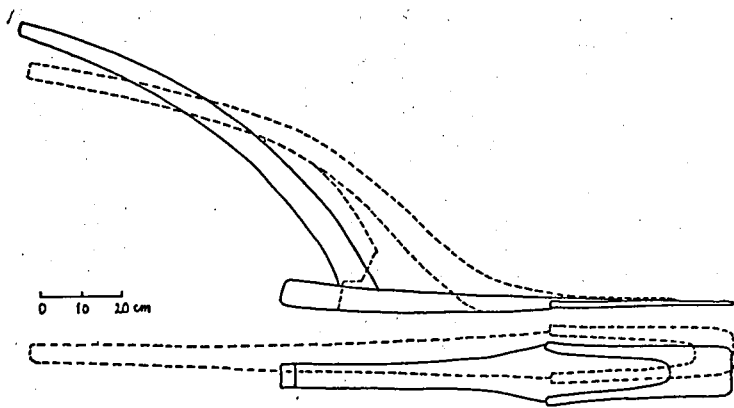


第二図 岩手のスキと魚沼のスキ  
実線は新潟県南魚沼郡六日町のスキ、ただし飯綱考古博物館所蔵の在来型のスキ、点線は前掲岩手県立農業博物館蔵の岩泉のスキ。

踏み鋤の二系列(中村)



第三図 新潟県南魚沼郡六日町上薬師堂のスキ  
在来型のスキを改良したもので、貝瀬幸咲先生による。



第四図 南魚沼のスキ  
実線は前掲上薬師堂の改良型のスキ、点線は前出飯綱考古博物館蔵の在来型のスキ。

- ④ スキの刃を地面にたて、刃先をすこし土にさしこむ。
- ⑤ 右足を台の後にかけ、思い切つて強く踏み込む。後足はのばし、前足は股をたかくあげて、しかも歩幅を充分にとつて。このとき「フミッパずすと、思わずガクンときて、息が止まりそうになる」。
- ⑥ さらに二、三度踏み込み、柄の付け根が土にもぐるくらいにまでスキをいれ、
- ⑦ かけていた足はずし、柄を押して土を掘りあげる。
- ⑧ そして、今までスキにかけていた前の足を左足の後まで大きく引き、後へ退り、
- ⑨ 「今度は左手左足を前にして、土を右側に掘りおこす」。
- したがつて、魚沼のスキでは、後ずさり、ひと踏みごとに手足をかけかえ、土を両側におこすうごきが対応する。このようなうごきは、極めてダイナミックなものである。そして、ツァク、ツァク、ツァランゴ、一、二、三、四、ばさん、ばさん、の要領で、リズムカルに、しかもかなり速いテンポですすめられる。その際、ウネの幅は七五センチ（これは一般にかなり広い）で、「その両側へ土が平均して分かれてゆくよう掘つてゆく」。それで一日五アールから六アールで、これを「一丁役」という。上薬師堂の辺りでは「どこの家でも鍬は二、三丁ずつ持っているが、鋤は一丁しかなかった」。
- 三、畑・つち 上薬師堂では畑作物といえは大小豆・ソバ・サツマ・サトイモ・ジャガイモ・アワ・キビ・ヒエで、そのうち「マメとソバで七割以上を占めていた」。ソバは（というのはマメは畑の土を鍬でならし、その日のうちに足で跡をつけ、その踵のところに豆をおき、お蚕の蚕糞〔桑のたべのこしに人糞と馬糞をませたもの〕をいれて、鍬で土をかける、だからスキは使わない）。

(1) 前年からのマメのウネをスキでこわし、

(2) 鋤で平らにならず。土塊は鋤を横にしてそれでたたくと崩れてしまう。なお鋤は今では長さ三八センチ、幅一四センチの刃で柄の長さ九〇センチ、重さ一・六キロの板鋤が使われているが、昔はここでもヒラグワ<sup>(1)</sup>といって風呂鋤を使った。

(3) 鋤で両側から土を盛り、ウネにする。これをホンテ<sup>(1)</sup>といっている。

(4) そこへソバを播き、

(5) 削りのこした土で土かけする。これにも鋤を使う<sup>(1)</sup>。

畑ははなれた山の平らな場所であり、そこは開墾地で、反対にムラのまわりには水田が開けている。昔は、この辺りでは養蚕が盛んで、またどこの家でも馬を飼っていて、「百姓の一〇月は忙しかった」<sup>(1)</sup>（ソバのワセは七月中頃、オクテは八月播き、一〇月刈入れなので、ソバの収穫は稲刈りと重なり合ってしまう）。山の開墾畑は一年きりでかえてゆく？ソバは肥料分の吸収力が強く、やせた開墾地での粗放栽培にもよく、土性的には洪積層上の壤土・砂壤土・埴壤土に多いといわれている。この辺りのこうした畑の場所を当てみると下新田統という土壌で、これは洪積世の堆積土壌で、表土は粗粒質、透水性に富み、保水力保肥力などは中程度で、農具は鏝のためやや使いにくいという<sup>(2)</sup>。

四、スキ以後 スキは上薬師堂では戦後も使っていたが、「出稼ぎで人手がなくなってしまう、ママヤソバはやめてしまった」<sup>(1)</sup>。もとソバ畑だった山の畑は「一時サツマを作ったり、牧草を植えたりしたが、四〇年頃ダムが出来、水が引けるようになり、水田に変えてしまった」<sup>(1)</sup>。

註

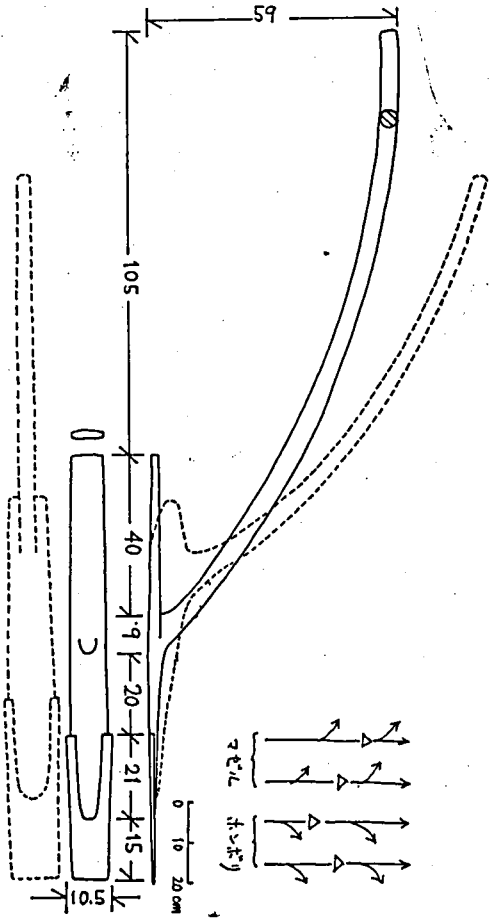
(1) 貝瀬幸咲先生による。

(2) 新潟県農業試験場の内山昭三先生による。

## 3 木曾御嶽山麓のスキ 長野県木曾郡開田村西野・末川

一、かたち 「クリ・クルミなどの自然木の幹からすきど、こをとり、そこから出ている枝の部分を柄にとって、スキガラ（鋤柄）とし、その先に鉄製のすきのは——すきさを装置したもの」<sup>(1)</sup>で、「スキガラは、自然の木の姿を見、その枝の角度がほぼ四〇度の傾斜のものを見立てて」<sup>(1)</sup>撰ぶ、「すきさはよい鋼で作られており、その（台にはめこむ・引用者）ミゾの調子が難かしく、その具合よいことが大切な要件」で「スキを使わぬときは、すきさをちよつと打ち出して緩めておく。長く使わぬときはすきさをはずして仕舞っておく」<sup>(1)</sup>。そうした木曾のスキを岩手のスキに重ね合せてみると第五図のようになる。この図によれば、木曾のスキは岩手のスキより柄が長く、逆に床から柄の頭までの距離は岩手のスキよりずつと低く、柄の角度はそれ分ねてくる傾向があり、そのためタテとヨコの割合は六対二一で（ヨコはタテの約三・五倍）岩手のスキより全体として横長なことがわかる。しかも刃先から台の後までの長さはヨコの半分もあり、幅は岩手のスキよりずつと狭い。もちろんそうした木曾のスキは後に触れる関東の柄鋤ともずいぶん形の違うものである。「その外観は、一見、関東型の踏鋤——踏鋤に似ているが、仔細に見ると、大きい相違がある。踏鋤はすきど、この頭を足で踏んで扱うよう丈夫にできているのに、この木曾のスキは、この頭にあたる部分まですきど、こが薄くできていて、とても足で踏むに堪えるものではない」<sup>(1)</sup>。「この形が似ておりながら、相違があるのは、踏鋤が主として畑の深耕用、あるいは田の深耕に用いられたのに対し、この木曾のスキは、専ら、畑の深耕とともにウネたて用のものであるからである」<sup>(1)</sup>！

二、うごき それならこのスキはどのようにして使うのか。このスキは「両手で柄を持ち、（中略）両手の力でスキをつきこみ、スキの頭にあたることを支えとして、すきさをのっている土をあげて、ウネをたてるのである」<sup>(1)</sup>。「さらに詳しくみるに、すきさを土につきこみ、スキの頭の方の弾力性を利用して土をあげる。このとき、スキの頭をテコ



第五図 木曾開田村のスキと岩手のスキ  
 実線は木曾郡開田村末川のスキ、点線は前掲岩手岩泉のスキ。下島万夫  
 先生、稲垣カツ氏による。



の支点とし、柄の尻を左足の膝の辺までさげることによって、よく土があがるのである<sup>(1)</sup>。いま、土を左側に返すとすれば、

- ① 右手でスキの柄のまんなか頤を持ち、
- ② 左手で柄の頭のところを持つ。手は両方とも手首をまげないで、甲が横・外側に向くようにして握る。「左右の手の間隔は一尺五寸くらい<sup>(2)</sup>」にとる。
- ③ 右足を前に出し（「先に出るのは手も足も同じ側<sup>(2)</sup>」）
- ④ スキさが地面に対して約一五度くらいの角度になるようにして、土に突きいれ、柄の分れ目が土にかくれるくらいまで掘りいれる。前足はかるく折り、後足はのぼし、体をスキにあずけるような形で体重をかけてゆく。
- ⑤ 「右手を中心にして、左手でスキを上下にゆさぶり、土を振っておいて<sup>(2)</sup>」
- ⑥ 台の元の所をテコの支点にして、スキを掘りおこし、土を左側に掘りあげる。掘りあがった土は扇形に散ってゆく。
- ⑦ 「土を掘りあげるとき、後へ引いていた足を踏み出し、前に出していた足の踵につける<sup>(2)</sup>」。一度足を揃えておいてから、右足を前に出して、土を返してゆく。後の足を前の足にくつつけるとき掘りおこした土を足で盛りながら、
- ⑧ 畑の隅までひとうねおこしてしまうと、帰りには盛りあげた土をスキの台の下側で打ちながら、ウネの上をたいらにならしてくる。<sup>(2)</sup>

「スキでやると、きれいにウネが出来るし、上手に土がまざってゆく。それに前をみながら進むのでウネが曲らない<sup>(2)</sup>」。「なれないうちは土がうまく上らない。一日やると人差指のもとに豆ができてしまう<sup>(2)</sup>」。このように木曾のスキに

は前進み・片側おこし・一方通交型のうごきかともなう。

三、畑・つち 「傾斜の畑では、傾面の下の方から等高線に沿う方向にウネをたてていく。そして、はじめのヒトスキを傾斜の上の方へあげる。これで深さ六寸くらしいの表面の土を上ウネへあげるわけである」<sup>(1)</sup>。「次のヒトスキは、傾斜の下の方へあげる。深さ六寸くらしいの表土をあげたその下の土が六寸ほどの厚みで下のウネの上へあげられるわけである」<sup>(1)</sup>。御嶽のこの辺りでは一年ずつ作物をかえて畑を作ってゆく。今年、ソバを作るとすると(アワなどはウネの作り方が違うのでアワの作にはスキはここでも使わない)。

(1) 前に作っていたアワのウネのところがスキで浅く掘りかえし、土をマゼル。このときには「左手を前、左足を先に出して、土は右側に掘りかえす」<sup>(2)</sup>。

(2) その後、ホンボリといって、今度はスキで深く踏む。そのときには「右手を前にし、右足を前に出し、土はまぜた方へ返す」<sup>(2)</sup>。ホンボリで自分の利き手・利き足が前へ出るようにするのである。ホンボリでウネとウネとの間(ハサマ)が広くなる。「まぜるときには雑作ないが、ホンボリは深く掘るので」大変骨が折れる。

(3) ウネのハサマへは山で刈ってきたソバを肥料にいれる。

(4) 両側のウネから足で土をとってハサマへ寄せ、土をかけ、そのまま半月ほどそっとしておく。

(5) スキでその上をならし、

(6) ソバの種を播き、

(7) 種がかくれるくらいにスキで土をかけ、ならしておく<sup>(2)</sup>。

「ソバはスキ一丁で作ってしまう」<sup>(2)</sup>。「マメのときには、ソバと同じように、スキでウネをたて、スキ(の白)でウネの上をたたいてならす」<sup>(2)</sup>。マメは、(1)スキでウネを盛り、(2)ツクシ(豆植え)で穴を掘り、(3)マメを播き、(4)風呂鍬で土

をかける。「マメのウネ幅は一尺四、五寸で、ハサマはちょうどひとスキ分の幅」である。この辺りは、秋も早仕舞、冬は雪である。ソバは五月中頃までに畑を作り、七月肥料をいれ、七月一日過ぎに種を播く。そして、九月の半頃とりにれる。それで、例えば、一年目にはソバを作る(山のシバと厩肥をいれて)、二年目にもソバを作る(同じ肥料で)、三年目にはヒエを作る(人糞をいれて)、四年目にはマメをつける(肥料をしないで)、五年目にはアワを作る(同じように無肥で)、六年目にはまたソバにもどる。山の畑へ肥料を運ぶには「縄で編んだコエモチにいて背負ってゆく。八貫目ぐらいで、お昼前に五、六回運ぶ。ソバ八俵作りの畑(ちょうど一〇アールに当る、ここでは畑の広さを収量でいいあらわしている)へ肥料を運ぶと、背中の皮がむけてきた。毎日毎日、雨が降っても背負っていった。こうした畑は「御嶽山麓の赤土の畑、どんな小さい石も出してあり、土がやわらかく、畝がきれいにたつてゆく」。「土は堆肥を充分にやっているのでやわらかい。金肥では倍も苦勞する」。土は古生層の上に関東ロームのような火山灰が堆積してきたもので、松本塩尻方面の波田統という土壌に対応させることができるという。それは細粒質で粘性性が弱く、透水性通気性に富み、耕耘は容易である。ウネたてなら一日(朝八時頃から四時のコピルをはさんで夕方暗くなるまで)一〇アールはゆくという。これはかなりな速さである。

四、スキ以後 このスキは「どこの家でももっていた」。それが「ミツグワがよいという人があり、ミツグワを使うようになり、スキは使わなくなりました」、それに「戦後は山のシバを刈る人さえなくなった。皆ヒラクワを使うようになった」。

## 註

(1) 向山雅重先生「木曾御嶽山麓のスキ」(『信濃』二〇)

一〇三七—四〇頁。

(2) 橋本信左氏、橋本よね氏、稲垣カツ氏、下島万夫先生による。

(3) 長野県農業試験場農芸化学部梅村弘先生による。

### 三、柄 鋏

#### 1 多摩のエングワ 東京都青梅市成木極指ほか

一、かたち 関東地方の山ぞい地帯の柄鋏には、およそ四つの型が考えられる。一つは都下三多摩地方のエングワ、第二は埼玉県の秩父地方や浦和大宮台地のムグリ(またはエングワ)、第三は群馬県下の柄鋏のうち、下仁田、安中地方の刃を据え、そのなかほどに太い長い柄をとりつけ、台の後には踏み込むとき足をかける木の部分が取付けられている。柄鋏の細部はそれぞれ所によって呼び方が違うので、ここではとりあえず、この板のことを台、足をかける木の部分のことを踏み板としておこう。柄鋏は畑の土おこしに使い、ムギの畑をはじめイモ・ダイコン・ヒエやアワの畑に使われているが、以下ではうごきを標準化させるため、「秋畑」すなわち秋のムギ作の場合にだけ限ってみてゆくことにしよう。さて、三多摩地方の在来型のエングワは、第六図のように、台の長さ約八〇センチで、その先きに長さ二五センチ、幅一八センチほどの刃を据え、元には長さ二五、六センチ、幅五センチ(断面矩形と円形の場合とがある)の踏み板を取りつけ、それに長さ約一七〇センチの柄が作りつけられている。柄は頭が直径三センチほど、台との接合部では五に一〇センチ角で、台に一六度ほどの角度でとりつけられている。柄も踏み板も通しホゾで接合されており、また柄と台との間には包みホゾで短かい束がいてある。そして、この束をまんやかに、柄と台とは藁の縄そのほかでからげられ、固定されている。こうしたエングワの形は、おしなべて一定で、この用具の形が完全に壘産型であることを示している。重さは四キロから四・五キロで、柄鋏の仲間のなかで、これは後にもみるように、とりわけ小さく、しかも軽い一群を形作っている。台の形は前後のすばまった、いわば舟型で、裏の両側は大きく面がとってある。

二、うごき いま、土を左方に掘りあげる場合についてみると、

① 左手で柄の頭の方、上四分の一くらいの所を握り、肘をまげ（上にむけて立て）、まず、柄の先きが左肩口に出るようにもってくる。

② 右手は柄のまんなかからやや下の所を持つ。左手は手首を曲げず、甲が外側に向くように持つ。右手は手首を返し、甲が下になるようにして持つ。

③ 右足を踏み板にかけ、腿がたいらになるくらいにして（後の左足はまっすぐのばして）、柄が土に対して約四五度になるくらいの角度で踏み込む。

④ 柄のはめこまれている辺りまで踏み込み（このときエングワ自体がやや流れるので柄と土との角度は約三〇度になる）

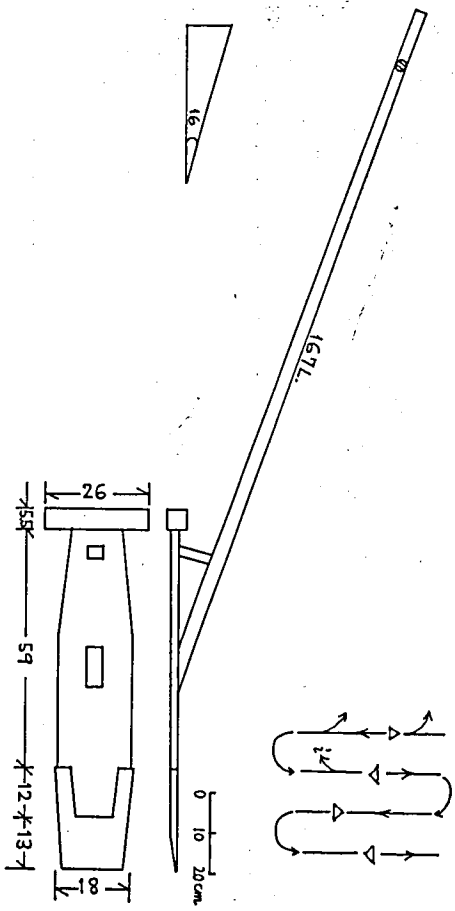
⑤ 柄をおこし、刃の方をすこし持ち上げて土をやわめる。

⑥ 踏み板から右足をはずし、

⑦ 手は前のままで、柄を押しさげ、台の上の土を掘り上げる。このとき踏み板が支点の役目をはたす。上体はこのときだけ身体の中から九〇度近くもまげる。

⑧ 足をずらし、身体を後へ引いて、①にもどる。

こうしてひとさく、畑の隅までうなってしまうと、そこで手足をかけかえ、左手を前にかけて、左足で踏んでもどってく。このように多摩のエングワは、うごきとしては片側おこし・後ずさりです。手足をかけた反転してくる型である。掘りおこすみぞは深さ二五から三〇センチで、「鍬より深くおこせる、鍬のようにしじゅう腰をまげて作業しないのでいのでからだ<sup>(1)</sup>が楽だ」、「ただし使うのにコツがある、それに土塊が大きい<sup>(1)</sup>」。エングワでおこせる広さは、成木では一



第六図 青梅市成木極指のモソゾラ  
浅井徳正、加藤秀雄氏による。

日二ないし三アールである。これはこの地帯の土の性質と地形に関係している？

三、畑・つち エングワの畑を昔のように作るとすれば、

- (1) 前の作物のウネをエングワで掘り返し、
  - (2) その土塊を四本刃のマンノウでくずし、畑をたいらにする。マンノウは柄の長さ一五二センチ、重さ一・二キロの先の四ツにわかれた短い(二三センチ)刃の鋏である。
  - (3) サクリ縄で筋をつけ、筋にそって、
  - (4) 平鋏ひらくわで浅くミゾを切る。平鋏は刃と台の長さ九五センチ、幅一四センチ、柄の長さ一六五センチ、重さ二・七キロ、柄角四〇度の風呂鋏である。
  - (5) 堆肥をいれ、(6) 種を播き、
  - (7) 平鋏で覆土する。
- エングワはこのように秋のムギ畑の「ハタケウナイ」<sup>(1)</sup>、土おこしに使う。種播きした畑の表面は、ほとんど、たいらであるが、後で土寄せするとうねの形が出来上る。極指きまゆびでは柄鋏のほか刃先が一本または二本にわかれたヤギリや、または二本鋏をエングワと同じ役目に使うことがある。そのときの畑の作り方は、
- (1) 先にヤギリで畑全体を無差別に突いて土をやわめてしまう。
  - (2) そして土塊を三本鋏でたいて細かく碎き、
  - (3) 昔は二本鋏(今は三本鋏)でうなう。これは刃の長さ四五センチ、幅一〇センチ、柄の長さ一三〇センチ、重さ二・四キロの鋏で、一名マタックワという。
  - (4) 平鋏ひらくわでみぞを掘り、

(5) 堆肥をいれ、(6) 種を播き、

(7) 平鋤で覆土する。

極指では「エンングワを使えるような畑は全体の一、二割」<sup>(1)</sup>しかなく、「エンングワはヤギリと二本鋤とを兼ねたようなものだ」<sup>(1)</sup>という。成木では畑の土についてマッチ、ヤマドリ（マッチ）、ポック、コッチなどの呼び名がなされている。このうちヤマドリは水気を含むと固くなってどうにもならない、反対に乾くとヤマドリの糞のように白く崩れる土である（これは重粘？の土壤か）。ポックは軽植土の土壤で、またマッチは壤土か植壤土の土壤のようである。東京都農業試験場の調査によれば成木川の上流には植壤土の畑、下流には植土の場所が広がっている。このうち植壤土の土壤は「多摩川の一つつた段丘面や、黒沢川、成木川流域に広く分布している。土質はやや粘りこくて比較的腐植に富み、壤土にくらべると劣るが、作物の生育には適している。しかし場所によっては小石をふくみ乾燥すると固まって耕耘困難なところもある」<sup>(2)</sup>。また植土の土壤は「霞川流域一帯の地（中略）および成木川の下流に見られる。土質は粘り強くて、養分の吸収保持力は大きいが、空気の透過性が悪く、乾燥すると固まって亀裂を生じやすい。しかし、この地域は市における数少ない水田地帯をなしている」<sup>(2)</sup>（引用者傍点）。その東には軽植土の地帯がある。これは「武蔵野の洪積台地を占める東青梅から新町へかけての地域がそれで、ローム層が厚くおおい、その土質はきわめて軽く、耕作は容易であるが、冬季には北風にあおられて飛散し、このため栽培作物は土でおおわれ、または根部を露出して生育を阻害することがある。また夏季に降水量が少なくと早ばつに見舞われやすい欠点がある」<sup>(2)</sup>。軽植土の所ではハタケウナイもずっと楽で「倍ぐらいははかどる。道具の目方だけではいってしまふ」<sup>(3)</sup>。また「深く耕さないでも作物自体の力で根が張ってゆく」<sup>(3)</sup>。だからここでは柄鋤など使わなくとも、鋤だけで充分ハタケウナイが出来るという。この場合の鋤は小平では明治の末までは、刃の長さが四五センチ、柄の長さ一五九センチ、柄角四三度のヒラグラ（風呂鋤）で、その後、刃の長



さ三六センチ余り、柄の長さ一五〇センチ、柄角四九度の三本鋏に置きかわっていった。逆に、多摩川の上流の小河内では、ハタケウナイは二本刃のマタグワ、ムギ畑のサクキリと覆土にはヒラグワ（サクリグワ、風呂鋏）の取り合わせで、マタグワは、ここでは単に「クワ」であり、「農具のうち最も重要なものであった」<sup>(4)</sup>。そうしてみると、柄鋏は平坦な軽埴土のヒラグワ地帯と山手のマタグワ地帯とはさまれて広がっていたのだろうか。

四、エングワ以後 たいらな畑の多かった下成木では「エングワは、たいらなところでは、ほとんど使っていた」<sup>(5)</sup>。ところが、明治の中頃、三本鋏が入ってくるとそれまでの平鋏をやめて、三本鋏を使う人がふえた。この三本鋏はサクリ三本<sup>さんぽん</sup>本<sup>ほん</sup>といって刃の長さが三七センチ、幅一三センチ、柄の長さ一五〇センチ、重さ二・三キロ、柄角五〇度であった。ところが昭和になって、同じ型の三本刃の鋏がハタケウナイにも使われるようになる。これはブッタテ三本<sup>さんぽん</sup>本<sup>ほん</sup>といって、サクリよりも刃の幅がすこし広い、やや重い三本鋏である（刃の長さ三三センチ、幅一七センチ、柄の長さ一〇六センチ、重さ二・五キロ、柄角六五度）。「ブッタテはエングワのように深くは掘れないし、一日二アールから三アールで、それも腰をまげねばならないので幾日も続かない。三日もやればいやになってしまう」<sup>(6)</sup>。それでもエングワのように使うのにコツがいらないので、結局、それまでの鋏鋏が三本鋏の型へと収斂していった。それに明治の末から「あらゆるヤツアイに田が作られるようになった」<sup>(3)</sup>。それもまたエングワの領域をせばめていった<sup>(6)</sup>。

## 註

(1) 加藤秀雄、加藤正市氏による。

(2) 青梅市史編纂実行委員会編『定本市史 青梅』（昭和四

一年同市刊）三七頁。

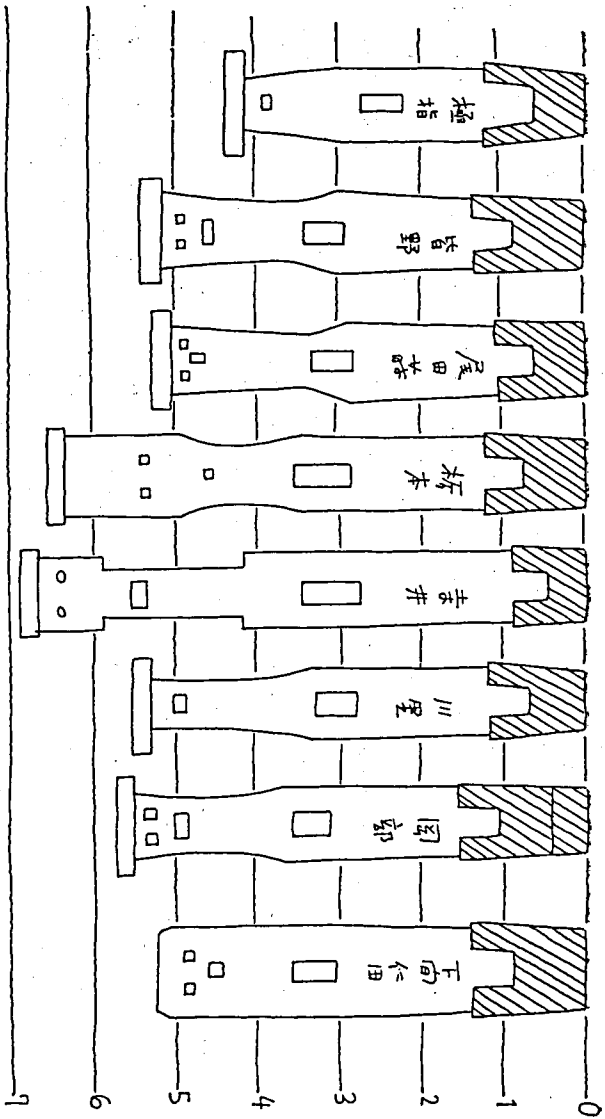
(3) 高山平平氏による。

(4) 東京都教育委員会『小河内文化財総合調査報告』第二分

冊三〇八頁。

(5) 野島厚之、高山平平氏による。

(6) なおここでこの地帯の農業について若干触れておく。近世この辺りは「村内山谷相連り、土性は小石交りの処多し、又真土赤土の処もあり、村を平均していはゞ七分余山林、其余は皆畑の地なり」（新編武蔵風土記稿卷百一七北



第七図 柄鉄の台  
 刃の幅はほぼ等しい。そこで刃の幅を単位にして台の長さを割ってみる。柄の穴の位置はどれも3単位目の線にあり、柄本や寺井のムネリでは柄の穴から後の部分が長くなっていることがわかる。川原、岡部は大塚和義氏による。

小曾木村の条)とあるように山がちの村で、わずかの耕地は年三、四ヶ月を支えるためのムギ、アワ、ヒエ、里芋、ツルイモ、大豆、小豆などの生産に当てられた。村の人たちは、はやくから青梅繭の織出しや養蚕、薪炭木材伐出しなどに従ってその不足を補った。その畑は北小曾木では寛文の御水打帳の数字によれば、上畑六%、中畑一六%、下畑一三%、下々畑一二%、切畑四二%で(定本市史青梅三五六、五七頁)、このうち切畑はこの場合「山林原野を開墾したもので、草木を刈取り、あるいはこれを焼いて、その焼灰を肥料として数年間作物を栽培する。数年間して地力が衰えると放置してその他の場所に移り、しばらくして、再びもとの場所を耕作するという方法」所謂焼畑(カッチロ)のことである(同上史同頁)。そして、その後第二次大戦まではこの辺りでも農家経営は「養蚕専業の観を呈

し、大正二年には畑の面積の二五パーセントが桑園となり、大正末期には畑地の六〇パーセント近くが桑園化するという趨勢であった」(同上七九一、九二頁)。「従って大麦などの耕作反別大いに減少し、そのうえ自給態勢の諸作物の作付形態に変化を生じ、今まで自給していた主穀すら購入するといった農家が増加して、いわゆる交換経済時代に移行していったのである」(同上同頁)。このような状況は柄楾地帯の西半分の関東山系の地帯には多かれすくなくあてはまる。上成木には大共有という共有山が五ヶ所あり、八月一日の山の口明けの日刈草を刈ってきて、下屋に積んで堆肥にし、昔はさくを深く掘り反二〇〇貫余も干草をいれた。昔からシシ(イノシシ)の多い地帯なので長いクネを築き、杉や檜を植え、畑をまもり、夜番をして猪害を防いだ。

## 2 秩父のムグリ 埼玉県秩父郡秩父市寺尾・同郡大滝村栃本・同皆野町富沢

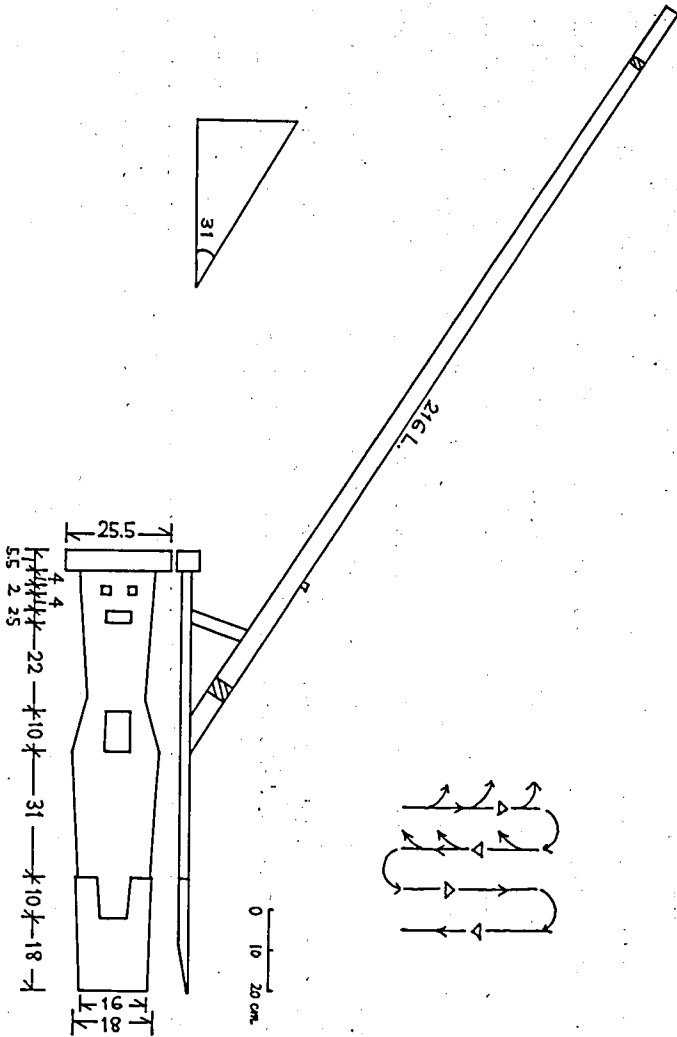
一、かたち 柄楾には所によって形ないし寸法に若干の違いが認められる。第七図は各地の柄楾について、その台と刃の部分抜き出してみたものである。図によれば、この部分の寸法の最も大きいのは埼玉のムグリ(またはイグワ)で、いま、刃の長さを一つの基準にとり(刃の長さは全体としてそう変らない)、刃と台とを区切ってみると、青梅成木の極指では基準の約四倍なのに、秩父の富沢や寺尾では五倍半、秩父大滝の寺井や栃本では六倍ないし七倍にも達するところがはっきりわかる。またそれにもなつて、台の形自体、極指の後をしばつてゆく型から、富沢や寺尾の一度しばつた尾をまた広げてゆく型、そして寺井や栃本のように後の部分のさらに発達した型へと移り変つてゆくことが推測され

る。この変化は柄を台につなぎ、とめる、ときのつなぎ、とめ方に対応していて、後をしぼる型では柄から尾のすばまった所まで藤や藁の繩を巻き、それで柄と台とをかがつてとめる。それに対して後の二つの型では台の最後部に小さな四角な、またはまるい穴をあげ、柄からその穴へ藤や藁の繩をまわしてかがっている。秩父のムグリには、刃と台の長さが一二〇センチ以上、一四〇センチに及ぶものもあり、重さも七キロ、九キロのものもある。刃は幅一五、六センチ、長さ二〇ないし三〇センチ、作りは鋳物で、これは他の柄鋏と変らない。柄はたいてい頭で二に三センチの楕円形の断面、先では六に四の四角な断面、そして、先から四〇センチの辺りに三分角のダボが埋め込まれていて、柄と台とをかがる藤や繩などをかけるようになっている。柄角は三三度で、前記の多摩の柄鋏よりは大分急である。柄は台に通しホゾで接合されていて、やはり短かい束がいれてある。台は踏み板に通しホゾ、または二枚の通しホゾで接合されている。こうした仕様は埼玉県下のムグリにはほぼ共通で、これらは完全な量産型である。ただし柄や台は、秩父の大滝村では、「地元の大工にこしらえさせる」。

二、うごき 秩父盆地のまんなかの旧尾田蒔地区の寺尾では、土を左側に返すとき、

- ① 左手でムグリの柄の頭から四分の一くらいの所を、手首を曲げないで、甲を外側にして握り、
- ② 右手で柄のちょうど半分くらいの所を握る。手首を返して甲が下むきになるようにして。
- ③ 右足を踏み板にかけ、腿がたいらになるくらいまであげ、
- ④ 柄の延長が地面となす角が四〇度ほどになるようにして、ムグリに体重をかけ、強く踏み込む。このとき左足をまげ、反動をつけ、柄のはめこまれていた辺りまで掘りいれる。
- ⑤ 踏み板にかけていた右足ははずし、その足を左足のところまで引き。
- ⑥ 両手の間隔はそのまま、左手が柄の頭のところまでくるように手を移動させる。

- ⑦ こうして柄を下に押し下げ、すこし土を浮かし、
- ⑧ 上体を約八〇度ぐらいまで曲げて、柄を倒し、土を掘りあげる。
- ⑨ そして、再び左足を後へ引き、両手を柄のなかほどの場所に移す。
- ムグリの操作には二つの型がある。「坂になった」傾斜の畑をおこすときには、一本ピキいっぽんといって、土を後ずさり・片側おこしでおこしてゆき、畑のきわまでくるとそこでよして、帰りはからでもどってくる。すなわち「土が落ちないよう」に下から上へ一本ずつ引いて上ってゆく。たいらな畑をおこすには、二本ピキふたぽんといって、畑のきわまでゆくと、そこで手足をかけかえないで、また掘りおこしてもどってくる。「三ムグリ半後へさがり、もどり三ムグリ半さがり、ウナイコミいといって、あいたミゾへマメやサツマのカラをいれる」。前記の一ムグリのうごきを三回続け（仮りに一ムグリで掘りおこすみぞの長さを六〇センチとすると三ムグリ半は二メートル余）、土を左側に掘りおこされ、前掘ったみぞにナラんでまたみぞができる。この二つのみぞの間に堆肥としてのマメやサツマのカラをいれる。このようなやり方だと畑は三ムグリ半の幅で横に仕切れ、作業が進められてゆく。忙しいときには、オイウナイいといって、何人かの人がこの幅で分担して、皆同じ向きで、一枚の畑をおこしてゆく。向きが同じなので、まごまごしていると、自分の目の前に他の人のムグリの柄の頭があり、まごまごしていると相手のムグリが背中へぶつかってくる。追いたてられるようにしておこした。だから「休めない」。朝早くから夜遅くまで、一日四、五アールおこした。使い方が難かしくて、子供のとき「しかられながらおぼえた」。いっぽう秩父の一番西の大滝村の栃本では、同じように土を左側にあげる場合、
- ① 左手で柄の頭のところを握り、
- ② 右手はそれより二〇センチぐらい下の方を持つ。両手とも手首は曲げないで、甲が外側にむくようにして。



第八図 埼玉県秩父郡皆野町のムグリ  
 図の右上はヤリウナイの様子を示す。秩父のムグリのなかでも、  
 これはとくに大きい。資料は小林抛英先生による。

③ そうして柄と畑とのなす角が八〇度ぐらいに柄をおこし、

④ 踏み板に右足をかけ、後の左足はまっすぐのぼし、右足は腿がたいらになるくらいに折って踏み込む。

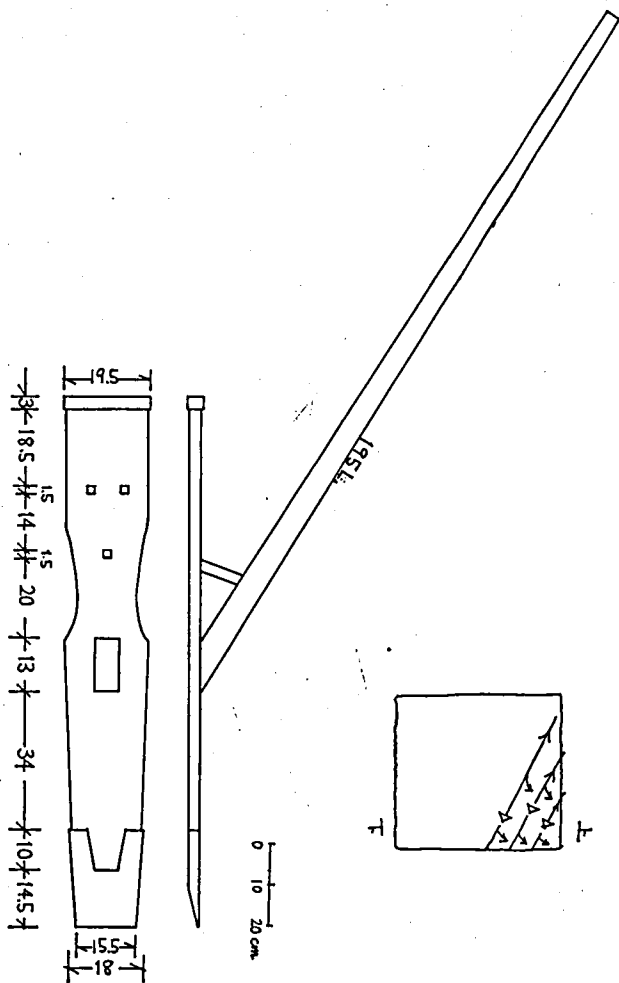
⑤ かけた右手がまっすぐのびるくらいまで踏みいれ、

⑥ かけていた右足はずし、柄を押し上げて、すこし土を浮かす。

⑦ 柄を倒しやすいよう左手を持ちかえ、

⑧ 柄を左へひねって土を掘りあげる。土は踏み板を支点にして、扇形にひろがる。このとき上体は約五〇度ほど屈折する。

傾斜した畑（ここでは大部分がそうした畑である）では、第九図のように、畑を斜めに下から上へ掘り進む。土が落ちないよう上の側に上げながら。「斜めだから、だ、がかけやすい」<sup>2</sup>。「坂の上の方から、だ、をおいて、からだをおっつけてゆく」<sup>2</sup>。こうして畑のきわまで掘ってしまふとムグリを肩にかついで最初の線までもどってくる。だから「帰りは休みのようなもの」<sup>2</sup>である。もっとも、それほど傾斜のない畑では帰りも土をおこしてくる。手足をかけかえて。こうしたう、<sup>2</sup>きは大滝型のムグリの形と密接に結びついたものである。大滝のムグリは台の後（柄の付け根から後）の部分がきわだつて長い。傾斜したかたい畑でもおこしやすいように。「深く突込んでおこすのが大変だ、それにはコツがい」<sup>2</sup>。ここでは一日おこして三ないし五アールせいぜいである。再び秩父盆地の入口の平坦な地帯の皆野町富沢では、土を左側に掘りおこすとき、やっぱり、①左手を柄の頭につけ、②右手で柄のなかほどを持ち、③右足を踏み板にかけ、④踏み込み、⑤「やっこい所は一度、かたい所なら二、三度」<sup>3</sup>続けて踏み込み、⑥かけていた足はずし、⑦左足を後の左足の所まで引きよせ、⑧からだをまげて土を掘りおこす。ここではムグリの操作にはヤリウナイとサカウナイとの二つの型がある。サカウナイは傾斜した畑で後ずさり掘りおこしてゆく方法、ヤリウナイは槍で突くように、た



第九図 秩父郡大滝村栃本のムグリ  
 図の右上は斜面の畑での進み方、土の上げ方などを示す。横田猪作先生、千島敬次郎先生による。



いらな畑を「前へ進んでゆき、アゼまでつくと(手足を)かけかえてもどってくる」方法である。そしてヤリウナイでは「サクは南北にたてる。ムグリは東西にいれる」<sup>(3)</sup>。サクとムグリとは十文字に交叉し、サクの並びとは別にムグリで掘りおこした土塊の列が並ぶことになる。「ムグリは毎年違う方へ返してゆく。土が動いてゆくといけないから」<sup>(3)</sup>。昔の人は「一日五アール、普通一〇アールを三日でやるという」<sup>(3)</sup>。

三、畑・つち 秩父盆地の中央部の寺尾ではムギ畑は、

- (1) ムグリでおこした後、
- (2) ヨツゴという熊手みみたいな四本刃の鋏でかいて細かく碎き、
- (3) クワ(台と刃の長さ五〇センチ、刃の幅九センチ、柄の長さ一三〇センチ、柄角四〇度、重さ一・九キロのミニのたつた風呂鋏)でマキミヅを切り、
- (4) 種をまき、(5) クワで覆土した。<sup>(1)</sup>

大滝村の栃本では、一〇月二〇日頃から一月初めにかけて畑にムギを播き、六月中頃刈取り、その後へマメ・アズキ・イモ・トモロコシなどをつけるが、ムギまきのときには後作のトモロコシの根などを取除いておいて、<sup>(2)</sup>

- (1) ムグリで畑全体をおこし、
- (2) ヨツゴで土塊を細かくくつき、(昔は丁字形のクレウチというのを使った)
- (3) 刃の先きの二つに分れたサクリックワ(風呂鋏)でサクを切り、
- (4) 肥料をいれ、(5) 種を播き、
- (6) クレウチで覆土した。

皆野町富沢ではムギとアズキ(またはマメ)の組合せによる畑作がなされているが、

- (1) ムグリで畑一面をうらない、
  - (2) それからムギまきには一月ほど間があるので、土がその間にかたくなってしまわないように、二度<sup>に</sup>ウナイといつてさらに二度目をウナイ、
  - (3) ヨツゴで土塊を細かく砕き、そしてたいらにし、
  - (4) その上にサクリ縄で筋をつけ、その筋にそって、サクタテ(単にクワともいう、やはりミミの立った風呂鍬)で浅くみぞを掘り、
  - (5) ムギを播き、
  - (6) そこへ、昔はマメの茹でたのに灰をまぜたのを肥料にして施し、
  - (7) 丸い木に竹の柄をつけた丁の字型のツチカケで覆土した。
- 旧尾田蒔村の寺尾では畑の土にはマツチとノツチがあるけれども、「ムグリはそのどちらにも使っていた<sup>①</sup>」。大滝村では「赤土のかたい所と細かい砂分のまじった場所とがあるが、(ムグリは)どちらでもやっていた<sup>②</sup>」「多少粘りの強いところでも、礫の多い少いには拘らず<sup>②</sup>」使うという。皆野町富沢では畑の土性は壤土で礫が含まれていて、「サクタテ鍬を使っている<sup>②</sup>と刃先が白く光ってくる<sup>②</sup>」。ノツチは「秩父郡の山間部に少部分及び狭山市附近で火山灰性洪積土壌を称する。ノカタのツチという意味が転化した俗称であろう<sup>④</sup>」。尾田蒔地区には尾田蒔統<sup>④</sup>といって、第三紀層の上の、砂岩や粘岩の風化してできた土壌型が分布している。これは「乾くと碎土しにくい、耕耘のやりにくい土壌<sup>④</sup>」である。このほか皆野町附近ではカベツチ<sup>④</sup>といって、植壤土で「褐色で硬度、粘度大である。主として建築材のカベ土として用いられる処から、かかる名称が与えられたもの<sup>④</sup>」らしい土壌が小部分、検出されている。

## 註

(1) 関根千代吉氏による。

(2) 千島堅三氏による。

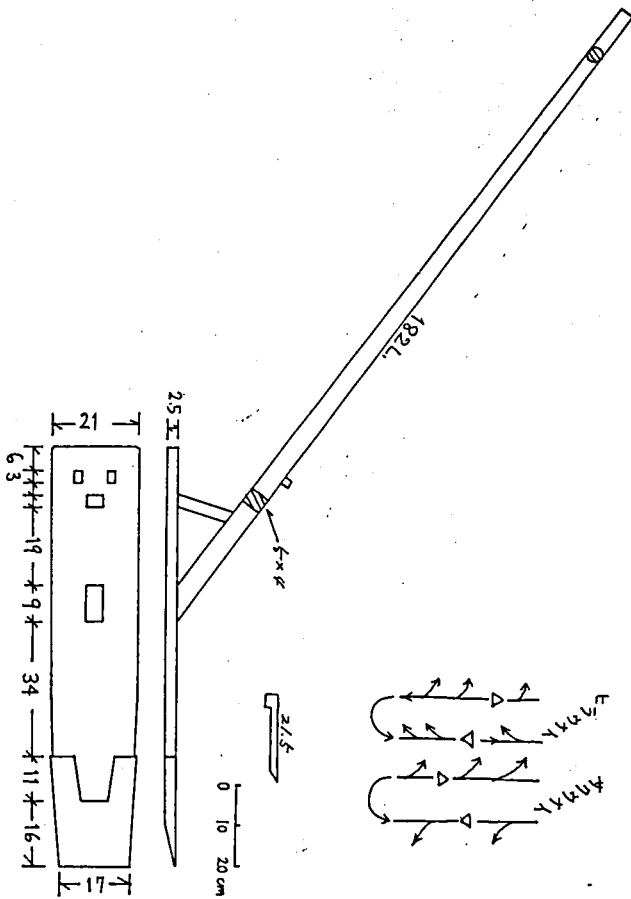
(3) 山口富一氏による。

(4) 県農業試験場の柴英雄先生による。大滝村は未調査の由である。また、埼玉県立農業試験場埼玉農試化学部資料第一号「埼玉県内に分布する土壌の俗称について」(昭和三十六年刊)四、五頁。いづれにしてもムグリの土壌としては、土性的には、壤土または埴壤土の土壌が対応するようである。なお、埼玉県の農業は地域によって次のように分類されている(埼玉農業年鑑編集委員会編『埼玉農業年鑑』第一巻七六頁)。第一・第二・第三地域は県の東の沖積地帯で稲作・普通畑作・養蚕ないしは蔬菜・鑿工地帯、第九地域は秩父の山間畑作・養蚕地帯、第八地域はそれに接する関東山系東側の山麓畑作・養蚕地帯、この二つの地域群にはさまれて、第四地域の摘田・普通畑作・蔬菜地帯や第五地域の中央沖積地の稲作・養蚕地帯、第六地域の北部洪積台地の畑作・養蚕地帯、第七地域の南部洪積地の畑作・蔬菜・茶・養蚕地帯などが広がっている。ムグリが使われて

いるのはこのうちの第九ないし第八地域で、自給農業が全戸の八六%を占める(と自給農業とは「特にこの地帯では十分に自給するという意味ではなく、ここでは生産物は全く販売する余裕がないと同時に大部分は、不足分を現金購入せざるを得ない状態をいう」(同上書八七頁))、そして山の多くは国有林なので個人の林業は発達せず、山の賃労働や養蚕経営によって現金を得ている(秩父郡内昭和二二年で四八・五%の農家が養蚕を行っている)地帯であった。この地帯では一〇アール以内の経営農家が全農家の九一%を占め、これは第一・二・三地域の五一%、一〇アール以上二〇アールまで四五%といった数字とは対照的で、一戸当りの経営耕地面積は四・五アールに過ぎなかった。なお『武蔵国郡村誌』によれば、古大滝村は地味は「色黒或赤諸植物に適せず」で物産としては猪・鹿・鈴羊・やまめ・繭・五倍子・桐・岩茸・木材をあげ、寺尾は地味は「赤く稲梁に適せず菽麦に適す」で繭・生糸・絹・煙草を産し、皆野は地味「色浅黒稲梁に宜しからず桑茶に適す」として、繭・蚕種・絹・生糸・煙草をあげている。

## 3 下間仁田のイングワ 群馬県安中市下間仁田

一、かたち 柄杓の北限は、いまのところ、群馬県下のインガ(イングワ)の地域に求められる。群馬県内では、インガは秩父から山ひとつへだてた神流川上流の多野郡上野村やさらに北の甘楽郡下仁田町、西牧村、砂義町、吾妻郡の原



第十図 群馬県安中市下間仁田のエンガ  
阪本秋太郎氏による。右上中段はトグシ。

町や中条町附近、榛名や赤城の山麓まで広がっている。<sup>(2)</sup> そのうち安中市下間仁田では、台の後ろに踏み板がついていない形のもが一般的である。このイングワは、第一〇図のように、幅二一センチ、長さ九〇センチ、厚さ二五ミリの平らな短冊型の台にこれまでと同じ鋳物の刃を据え、長さ一八二センチの割合細い柄をとりつけたもので、柄は台に通しホゾで接合されていて、また幅四センチの束<sup>つか</sup>がいてある。台の手前方には三に一・五センチの四角な穴が二つならんで穿たれていて、柄をかけるための籐が通せるようになっており、柄にはまた、その籐をかけるための小さなダボが埋められている。そしてその籐を締めるため長さ二一・五センチのL字型の竹のトグシが籐のねじ目に差しこんである。重さは六・二キロで他の柄鎌とさほど変らないけれど、柄と台とのなす角は三七度で、かなり急である。これはこのエングワを使うときの姿勢、いわゆる立ち腰の労働と関係があるのではないかと考えられる。

## 二、うごき イングッで土を左側に返そうとする場合、

- ① 左手で柄の上から三分の一ほどのところを握り、
- ② 右手は柄のちょうどまんなか辺りにかける。左手は手首をまげずに、甲が外側に向くように、右手は手首を返し、甲が下側に向くように。
- ③ 左手をのぼし、イングワを立て、柄が土地と八〇度になるくらいで刃先を土に突立てる。このとき、左手は頭の左上の位置にある。
- ④ 右足を台の一番後にかけて、
- ⑤ 強く踏み込む。同じ姿勢でこれを二、三回繰り返す。このとき柄の角度は土に対して約六〇度ほどである。左足を折りまげ、反動をつけ、右足の膝が完全にのびきるくらいまでのばす。
- ⑥ かけていた足はずし、台の左縁を支点にして静かに土をゆすり、

⑦ 土を掘り上げる。このとき上体をからだの中心から三〇度程度まげる。「百姓の仕事でコシが痛たくならないのは、これだけ」。

う、ない方にはヒラウナイ、サクウナイ、サカウナイ、ヒッコヌキなどの型がある。ヒラウナイは「後ずさりしながら、一度に三回ずつ踏み込んでうなう」<sup>(2)</sup>。そして畑の隅までいって、またもどつてくるときには手足をかけかえて土を同じ側に掘り上げてくる。これが出来る人はもう一人前で、一日一〇アールおこせるといふ。サクウナイは「最初土を左に二回ずつ踏んでおき、帰りはその隣りを同じようにしておこしてくる」<sup>(2)</sup>。みぞは、この場合、イングワ二本分で一日一五アールおこせる。サカウナイは、傾斜の畑のうない方で、「土が一方だけによってしまわないう」<sup>(2)</sup>土を高い方に掘りおこしてゆく。「これには等高線の向きに掘りすすんでゆく場合と、高い方に背を向けて掘ってゆく場合とがある」<sup>(2)</sup>。ヒッコヌキはムギのうね間の土をやわめるような場合の掘り方で、「土は返さない、ただ刃を土に差しこむだけで」、土をゆすって置いて、そのまままで抜いてしまう。この辺では「一軒に男三人いれば、イングワが三丁あった」<sup>(2)</sup>。ただしそれはたいへんな労働で「一反うなう人は、昼、一升飯を食わないと仕事にならなかつた」<sup>(2)</sup>。作代を雇うときイングワで畑をひとさく、掘らせてみる、そうすると、どれくらい根気のよい作代になれるかどうかとわかれるという。

三、畑・つち 碓氷川の下流のこの附近は、段丘と谷間たにまとのいりくんだ地帯で「段丘上は耕されて畑や桑園となり、段丘下の低平地には田が開かれている」<sup>(3)</sup>。昭和三四年「全耕地面積に対し田は二九・九％であり、畑三〇・四％、樹園地三九・七％」<sup>(3)</sup>。そのうち桑園は三八・六％に達した<sup>(3)</sup>。畑では、

- (1) イングワでおこした後、
- (2) そのまま一週間ぐらい放っておく。これをシャスメといっている。
- (3) 掘りおこした土塊は馬にひかせたマンガでくずし、(馬はどの家でも飼っていた)

(4) 大きい大きな土塊はテングワ(手鋏)やフリマングワ(振りマングワ)でさらに細かくし、  
 (5) 昔は風呂鋏でサクを切る。今は刃先の幅二・五センチ、長さ四二センチ、柄の長さ二二七センチ、重さ二キロ、柄角五七度の改良型の板鋏が使われている。サク間は七二センチ。

(6) そこへ厩肥をやり、

(7) 種を播き、(8) 風呂鋏(今は板鋏)で覆土する。

馬は田の馬耕にも、肥料運びや桑とりにも、多面的に使われていた。この辺りでは田と畑と養蚕が忙しくとりあわさっていた。畑の土には「カタジとカルッチとがある」<sup>(2)</sup>。カルッチは浅間の火山灰の土壤であるが、「イングワはどちらにも使われる」<sup>(2)</sup>。この土壤は群馬県農業試験場の調査における梅木原統4や向原統3に当たるとらしく、浅間火山系の火山灰・火山砂・浮石などの火成岩で、土性は粗質、保水性は中程度で、透水性が大きく、乾きやすく、農具を使う場合、わずかに抵抗を感じるが、一般に土壤の「反転がしやすい」とされている。<sup>(4)</sup>

註

(1) 県立博物館の阪本英一先生、県農業試験場の斉藤恵亮先生による。

(3) 安中市誌(昭和三九年同誌編纂委員会刊)五八一・八二頁。

(2) 阪本秋太郎氏による。

(4) 県農業試験場の斉藤恵亮先生による。

#### 4 改良型

a 青梅のエングワ

一、かたち 在来型のエングワやムグリは、例えば多摩では三本刃の鋏に、埼玉県の埼玉・屈巢の辺りでははやく牛や馬にひかせる犁に、そしてその他の地域では戦後自動耕耘機に、それぞれ置きかえられていった。しかし場所によつ

ては柄鋏の農業はそう簡単にはなくなかなかつた。それどころか在来の柄鋏を改良して新しい柄鋏を作り出すための努力がはらわれた。都下青梅地方の四本刃のエングワ、秩父地方の改良ムグリ、栃木県小山地方の栗田式などがそれである。青梅の四本刃のエングワは刃先の幅一七センチ、刃の長さ八三センチ、幅二五ミリで、厚さ五ミリの鉄の板を組合せ、ポルトで接合したもので、刃先から踏板までの長さは在来のエングワとそれほど変らない。しかし、重さは六・七キロに及び、柄の長さは二〇二センチで、値の上では、秩父のムグリにやや近い値を示す。柄角は二〇度で、在来型とそれほど違わない。大正時代、青梅の鍛冶屋さんが三本刃の鋏（備中鋏の型の鋏）にヒントを得て作り出したという。そのため土への通りは大変よい。<sup>①</sup>

二、うごき 土を左に返そうとするとき、やはり在来型と同じように、

① 左手の肘をまげて、柄の頭から六〇センチくらいの所を握り（柄は在来型よりずっと長いので、このとき柄の頭は左肩口に出してしまう）、

② 右手で柄のまんなか辺りを握る。手は両方とも手首をまっすぐにして、甲は外側に向ける。

③ 右足は腿がたいらになるまであげ、踏板にかけ、

④ 左肘を上へのぼし、柄をおこし、地上に対して約五〇度ほどの角度で強く踏み込む。左足はまっすぐのび、柄は正面からみて左へ三〇度ほどフレた形で踏込まむ（これは他の柄鋏の場合でもやっぱり同じである）。

⑤ 同じようにして、続けて二、三度踏み、充分掘り込んでおいてから、

⑥ 右足をはずし、

⑦ 右足を引いて、左右両足の踵をそろえる。そして、両手の間隔はそのまま、左手が柄の頭にくる位置にまで両手をずらす。



⑧ は、<sup>(1)</sup>ずみをつけ、柄を押し下げ、刃の上ののっている土を掘り上げる。「踏んで上げるとき、ヒョイと上げる。それがコツ」。<sup>(1)</sup>このとき上体は直角になるくらいまでまげる。同時に左足を一步後に引いて最初の姿勢にもどる。

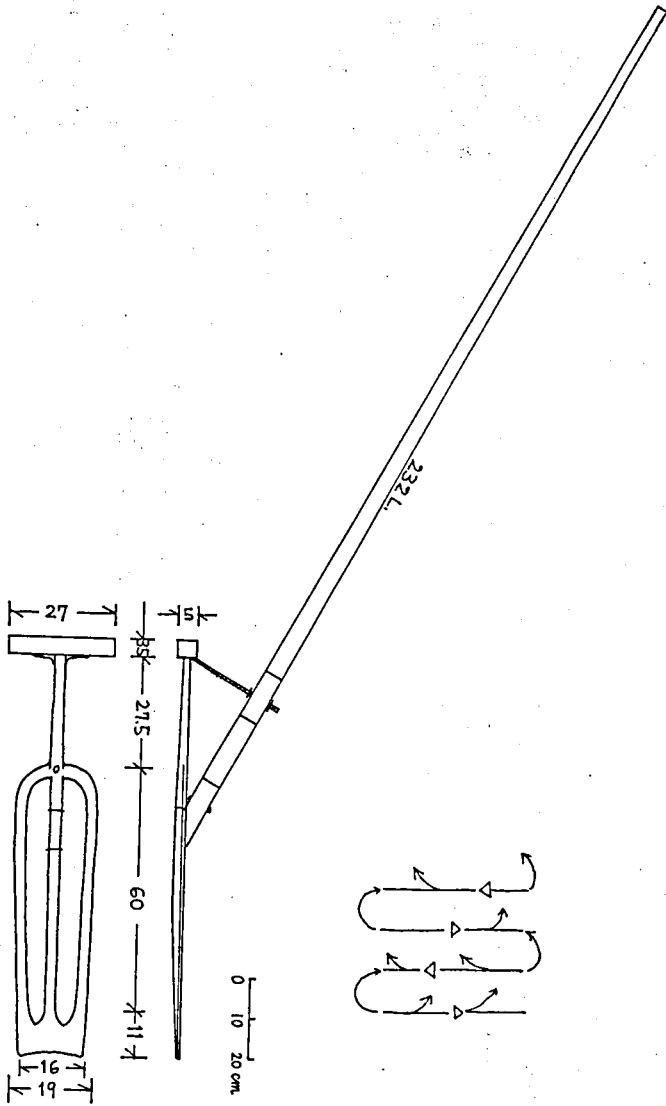
ひとさく、掘り上げると、畑の隅で手足をかけかえ、反転してもどってくる。改良型のエングワのうごきは非常に躍動的である。「親にうるさくいわれて、ようやく道具に振廻されなくなった」<sup>(1)</sup>、そのかわり「畑を掘返すのが簡単に出来る」(七五センチのウネでも五回で完全に返せる)、「<sup>(1)</sup>鎌と違って「幾日やっても疲れない」。畑・つちの状況は在来のエングワとほとんど変わらない。

b 秩父(大滝村)のムグリ

一、かたち 長さ九二センチの丁の字型の柄の先きに長さ四三センチ、幅二〇センチの刃をボルトでとめたもので、全体鉄製である。刃の形には板刃のものと先きが四本に分かれたものが作られている。柄は刃に対して五五度の角度で取り付けられていて、柄の頭の高さは八〇センチである。傾斜した畑では、斜面の上の方から、だをおいて、下の方へ向く姿勢をとると、柄の頭がちょうど下腹の辺りになるようになる。刃の後には踏み板があり、重さは在来型と同じ六・八キロほどである。このムグリはシャベルと同じように、女の人でもたやすく使える、だからこの辺りでは現在これが盛んに使われている。そして今では畑仕事も女の人の仕事である。戦後、男の人が山林や土木工事に出てしまい、畑の作り手がなくなってしまったが(それまで畑は男の人たちが在来型のムグリでやっていた)、ちょうどその頃、これが広まったといっている。山の傾斜の畑では、機械はいれないし。

c 小山のエグワ

一、かたち このエグワも台と刃とがひとつづきで、それに長さ二三〇センチの長い柄と長さ二七センチ、太さ五センチ角の踏み板がとりつけられている。刃の先の方には厚さ二ミリの主軸を中心に、左右に大きく窓があけてある。刃



第十一図 栃木県小山市白島のエグワ  
改良柄鋤、野州藤岡栗原式の焼印がある。大嶋暁雄氏による。

の幅は一九センチ、刃先から踏み板までの長さは約一メートル余りである。重さは八・二キロである。柄と刃とはボルトで、柄・刃・踏み板などはボルトで接合されている。刃の主軸は土にはいりやすいよう底が舟底型に工夫されている。刃の形はこの地方の唐鍔（まがら）からきている。<sup>(1)</sup>

二、うごき 土を左側に返そうとするとき、このエグワでは、

① 右手を先に出し、柄の下から四分の一ほどの所を握る。

② 左手は、柄のちょうどまんなか辺りを持つ。かるく肘をまげて。柄が長いので、柄の半分以上が左肩口から出てしまう。両手とも手首をまげず、甲は外側に向くようにして。

③ 右足を踏み板にかけ、後の左足をややまげ、右腿はたいらになるくらいまであげて踏み込む。

④ かけていた右足はずし、左手をのばし、柄の頭から全体の四分の一ぐらいの所まで手をずらし、上体を直角になるくらいまで折りまげ、

⑤ 踏み板を支点にして、土を掘りおこす。

⑥ 後へさがって、もとのうごきにもどる。

畑の隅までひとさくうなってしまうと、手足をかけかえ、またおこしてもどってくる。後ずさり・片側おこしで反転してくる。こうして天地返しできる広さは一日七、八アールで、これは昔の（在来型の）エグワとそう変らないが「この方が楽にうなえる」。<sup>(3)</sup> ただし「余り刃先を土に深くいれすぎてもいけないし、刃のいれ加減がむずかしい」。<sup>(3)</sup> 「その人の体格によって、余りいれすぎても引けなくなる。いれ加減がむずかしい」。<sup>(3)</sup> 戦前にはこの辺りでは「村のどこの家でも使っていた」。<sup>(3)</sup>

三、畑・つち この辺りは利根川と渡良瀬川との合流地域である。畑は

- (1) エグワでウナイおこし、
- (2) 肥料をふりいれ、
- (3) ショウジマンガ(振りマンガ)で碎土し、
- (4) テグワでウネをたて、
- (5) 種をまき、(6) 足で覆土する。

この辺ではマツチの場所と砂交りの場所がいりくんでいるが、エグワはその両方の場所を使った。「とくに砂交りの所はやりやすかった」<sup>(3)</sup>。「本当はマツチの所はやりにくい<sup>(3)</sup>が、この辺はマツチばかりなので」<sup>(3)</sup>。マツチの畑にも使った、ただしマツチの畑では「土を細かくするのに骨がおれる」<sup>(3)</sup>。

註

(1) 下成木の高山半平氏による。

(2) 大嶋曉雄氏による。

(3) 間々田町白鳥の片柳啓一郎氏、金沢佐吉氏による。

四 あ と が き

一、かたち 踏み鋤の二つの系列には、いうまでもなく、まず形の上での大きなへだたりが見出される。第一表は、念のため、その点を数字の上で追ってみたものである。この表によれば、柄鋤はスキの場合より、重さが約倍、タテの値も倍近く、ヨコの値は三割内外多くなっていることが確かめられる。また、刃先きから台の元までの長さは柄鋤もスキもそれほど変わらないが、刃先の幅は柄鋤の方が広く、刃の長さは逆にスキの方が長くなっていることがわかる。これは、柄鋤には刃幅の広い、短かい鋳物の刃が据えられているのに対して、スキの系列では、いいあわせたように、細身の長い打物(鍛造)の刃がはめこまれていることの数字的な表われに外ならない。柄の様子は第一表からだけでは充分にと

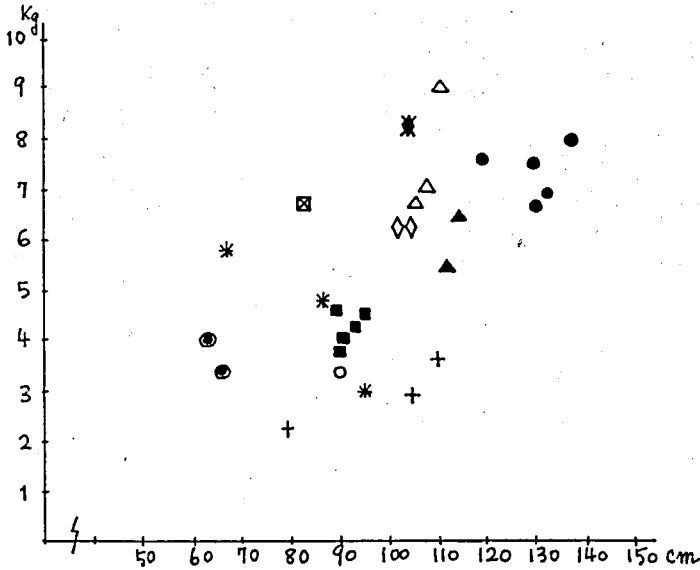
第一表 踏み鋤の二系列 寸法的に

みだし	うちわけ	ところ	重さ kg	タテ cm	ヨコ cm	タテとして	台と刃 cm	刃の巾 cm	刃の長さ cm	柄の長さ* cm
2.1	岩手	岩手、下閉伊、岩泉	3.0	85	175	2.1	95	13	45	127
2.2	魚沼	新潟、六日町、下葉師堂	4.5	73	179	2.5	111	16	46	108
2.3	木曾	長野、開田、末川	3.0	59	210	3.6	105	12	36	162
3.1	多摩	東京、青森、極指	4.6	65	213	3.3	89	18	25	167
3.2	秩父	秩父、寺尾	6.7	102	233	2.3	106	20	20	195
a.	寺	埼玉、大滝、栃本	6.7	106	225	2.1	130	19.5	26	195
b.	栃	埼玉、皆野、富沢	9.0	125	245	2.0	110	18	28	216
c.	富	群馬、安中、下間仁田	6.2	114	210	1.8	105	21	27	182
3.3	下間仁田	群馬、安中、下間仁田	6.2	114	210	1.8	105	21	27	182
3.4	小山	栃木、小山、甘島	8.2	118	260	2.2	103	19	—	232

\* スキ系列では柄の頭と台への付け長しを結んだ際の長さとする。

らえられないが、柄鋤の方が格段に長く、柄鋤の方がスキの方より全体として寸法が大きいことがうかがえる（タテとヨコとの割合は柄鋤・スキともそれほど変わらない）。そうした柄鋤にはまた、多摩のエンングワの型、秩父のムグリ型、あるいは下間仁田型のように、所によって細かい型がみられるが、しかし、いずれにせよこれらは完全に量産型で規格的である。このような規格性が何時頃形作られたか、それは未解決の問題である。しかし、現在では、そのような規格性が、かたちの上で、クワの系列と柄の系列とを分ける最も大きな特徴となっているのである。

二、うごき 二つの踏み鋤の寸法上の差、構造のへだたり、等々はうごきの違いとも係りを持つ。柄鋤では土を返すとき、踏み板から足をはずし、その足を後の足に揃え、同時に手の位置を柄の頭の方へずらし、テコの力を最大限に生か



第十二図 踏み鋤の大きさ・重さ

- 秩父郡大滝村のムグリ
- △ 秩父市寺尾、皆野町のムグリ
- ▲ 大宮市周辺
- ◇ 群馬県下間仁田、妙義のエンガ
- 青梅市成木のエングラ
- ⊠ 青梅市成木の改良型のエングラ
- 君津市亀山と三浦半島の柄鋤
- 新潟県南魚沼郡六日町のスキ
- \* 岩手県普代遠野などのスキ
- + 長野県木曾郡開田村のスキ

縦軸は全体の重さ、横軸は刃先から台の元までの長さを示す。踏み鋤では台の幅、刃の大きさなどは余りかわらない。柄には多少長い短いがあり、太い細いがある。しかし、大きく違ってくるのは台の部分の長さであり、形である。

すようにして土を掘り上げる。そのうごきは極めて躍動的である。ところが、スキの系列では、木曾のスキを除いて、むしろ後ずさりするときの左右の手のかけかえ、足のかけかえがうごきのポイントになる。というのも柄鋏では土はひとごとく、続けて片側おこしであるが、岩手や魚沼のスキでは一踏みごとに左右両側におこしてゆく。スキの系列では、木曾のスキ以外、柄は作業する人の胸の前辺りにあり、すくなくとも在来型ではうごきはいたって細やかで、柄鋏ほどの派手なうごきはみられない。

三、畑・つち 踏み鋏の二系列のこのようなうごきの違いは、また土の条件の違い、農業の違いとも深く結びついていると考えられる。第二表のように、スキの土壌は、いいあわせたように、火山灰の堆積した、透水性通気性の大きい、比重の小さい土壌である。これに対して、柄鋏の農業に対応しているのは同じく土性的には壤土であつても、土塊をほぐすのに四ッゴ（四本刃の熊手鋏）を必要とするような土壌なのである。そして、これら二系列の用具を使つての農業は、スキ系列では、岩手のヒエ・ムギ・大豆の二年三作型、魚沼のソバ・マメ型、木曾のソバ・ソバ・ヒエ・マメ・アワの年一作型のように、畑に、とにかく間をあける農業である。これに対して柄鋏地帯ではムギ、マメの組み合わせのように年中間をおかない、それに養蚕までからみあつた、忙しい農業が営まれている。こうした農業において、スキ系列では、前作のうねくずしが主たる役目なのに対し、柄鋏ではハタケウナイ、すなわち全面耕起がその役目なのである（秩父のヤリウナイのようにムグリの方向とサクの方向とが十の字型に交る畑の作り方は、畑作りの諸段階のうちで最も高いものとされている<sup>①</sup>）。こうした踏み鋏による二つの農業は、理念的には、それぞれ、自給的な雑穀農業と商業的な色彩の濃い、ないしはそれに傾いた生産生活の姿に結びつく。だとすれば、私たちは、改めて、「踏み鋏の二系列」にとどまらず、「踏み鋏農業の二類型」について議論してみなければならぬのではなからうか。

（四八年二月二日まとめる）

第二表 踏み鋤の二系列 うごきと畑・つち

うごき な	うごき				畑・つち							
	前の 手	前の 足	元の 手	踏み 戻し 方	もど り	使 い 途	作 物	砕 土	ミ ゾ 切 り	土 か け	1 日 の ha	土 壌
2.1 岩手のスキ	右	右	頭	後	左右	うねくずし	ビエ+大豆	(ナジ)	シ+ク	シ+ク	5—10	軽い壤土
2.2 魚沼のスキ	右	右	頭	後	左右	うねくずし	ソバ+マメ	ヒラゾ	シ+ク	ヒラゾ	5—6	砂壤土
2.3 木曾のスキ	右	右	頭	前	—	うねくずし	ソバ+マメ	(ナジ)	(足で)	スキ	5—10	壤土
3.1 多摩のエン ゾク	右	右	上	後	左	はたけうたい	ソバ+マメ+他	ソバゾク	ヒラゾ	ヒラゾ	2—3	壇壤土
3.2 秩父のム リ	右	右	上	後	左	はたけうたい	ソバ+マメ	ソバ	ク	ソバ	4—5	壇壤土
a. 寺尾	右	右	頭	後	左	はたけうたい	ソバ+マメ	ソバ	ク	ソバ	3—5	?
b. 栃本	右	右	上	後	左	はたけうたい	ソバ+マメ	ソバ	ク	ソバ	5—10	壤土
c. 富沢	右	右	上	前	左	はたけうたい	ソバ+マメ	ソバ	ク	ソバ	5—10	軽い壤土
3.3 下間仁田の ソングク	右	右	上	後	左	はたけうたい	ソバ+マメ+他	ソバ	ク	ク	5—10	軽い壤土

註

(1) 畑作には四つの段階が想定されている。最初の段階は木の枝か掘り棒で土に穴をあけて塊茎作物を栽培する方法である。第二はいわゆる掘り棒 Grabstock を使って土を掘りかえすものである。この方法でもかなり広い土地を掘りおこしイモ畑などを作ることができる。第三は大地に縞状のみぞないしうねをたてる方法で、その主要な用具は

Furchenstock (Schaufel) である。実は踏み鋤はそうした用具なのである。最後は犁 (Plug) を使うもので、これは必然的に前段階のうねをたて、農業を発展させたものである。みぞ掘り(あるいはうねをたて)農法の進んだ段階では、スキ・犁の掘りおこしと作物のうねとが関係なく出来る、全面耕起の方法が行われる。なお畝農業はこれらとは一応別系列の農業と考えたい。



## 余論

一、それなら踏み鋤の二つの系列の間には系譜的にどのような関係が考えられるだろうか。それには、そのどちらから他方が派生したという場合（多分スキ型から柄鋤が生まれる場合）、二つが間接的につながりあう場合（スキ系列と柄鋤との間に共通の祖先が見出される場合）、それにながら、場合の三ツが考えられる。こうした問題を物証主義的にすすめようとする、いきおい出土遺物にたよらざるを得ないが（従って現実に資料を土のなかからとりあげたことのある人、資料を整理したことのある人が一番よく知っていることになるけれど）、（一）スキ系列に続きそうな遺物は今のところ出ていないようである。（二）スキ系列と柄鋤との共通の祖先らしいもの、これも出ていないように思われる。（三）柄鋤系列に属する遺物、これも確かには出土していないように思われる。なお（一）（二）については刃先きが出土した場合、鋤か否かの（鋤と鋤とが分化していたとすれば）判定はかなり難かしかろうと思われる。

二、しかし（三）については柄鋤系列に結びつきそうな遺物が出土している。例えば、唐古遺址における平鋤1型・2型がそれである。とくに2型がそれである。同じ形ものは滋賀県の大中遺址その他からも出土している。ただし、この種の用具はむしろ農業土木や道路や建物の工事のときの土掘り、土よせ、土もりの類だったかもしれない、後の北野天神縁起の土掘りや伝三浦出土の中世遺物を経て現在の雪かきなどにその型をとどめているというのが私の想像である。多摩のエンジンワは発達した秩父や下間仁田型の柄鋤より全体として小さいし、千葉県君津市の亀山の柄鋤も三浦半島南部の柄鋤も台の部分はいささか小さいので、小さい柄鋤が古い型ではないかと一応考えられる。そうすると柄鋤と出土遺物との距離はいささかちまってくる。ただ、古代中世の遺物と近世以降の柄鋤とは、足で踏めるよう積極的な工夫がなされているか否かの差は残るけれども。若しそうなら、最初スキ系列の踏み鋤が広まっていて、その基盤の上に新形式の柄鋤がとりいれられたという想像も成り立たないわけではないが、現在私たちが接することのできる資料の上からは、柄鋤

系列はスキ系列とは一応別個に、例えば唐古の平鋤刃りから発達したという筋立てが考えられそうである。

三、けれども、(一)や(二)のようにスキの系列に直接連なりそうな遺物が出てこないからといって投了するのはまだ早い。そうした場合、しばしば、踏み鋤それ自体は残りにくいかもしれないが、鋤の仲間の用具で残りやすい用具があれば、その用具を出土遺物の目録から探し出し、間接的に踏み鋤(ないし踏み鋤農業)の存在を推定しようという行き方がなされることがある。いわば民族学的考古学的方法というのがそれである。アワヤヒエヤキビなどの穀物には、その畑作り・収穫・調整の用具として、種いれ・踏み鋤あるいは犁・打穀棒・白杵・箕・それに穂がり、(穂刈り)であれば小さな穂ずみ鎌が使われると思われるが、このうち穂ずみの鎌は小さな刃物や貝がら、そして古くはHinsesser 所謂石庖丁だったと考えられる。若しそうなら、石庖丁は出土遺物の目録にも容易に見出すことができるし、貝鎌にもその可能性が残されているといつてよい。そこで、これらの遺物から逆にアワ・ヒエ・キビなどの栽培がなされたことを推定しようというのである。これは確かに推定のための一つの方法だと思われる<sup>1)</sup>。しかし、アワ・ヒエ・キビなどの穀物が穂がり、で収穫されたということと、それらが鋤・土掘り・うねたて、農法によって栽培されるということとは必ずしも確実に対応するとは限らないようである。北海道では、昔、これらの穀物の収穫にはイチヤビバ(穂ずみのビバ)「かわしんじゅ貝」が使われ、貝が得にくくなると鉄片やまきり、や庖丁などでビバを形どり、これをカネビバ(鉄のビバ)といつて使ったという。北海道では、ある時期以後、確かに踏み鋤が使われ、アワヤヒエヤソバが栽培されていた。その鋤は岩手のスキのように木の枝を台(それに柄)にしたもので、このスキを操作している写真は海外にも紹介されている。そこで、ビバと踏み鋤とは北海道では仲よく結びつきそうなのだが、ビバでの穂がり、はプラウが導入されてから後まで続けられ、その上「幕末以来農業の奨励が積極的に行われるに及び、鋤、唐鋤、踏鋤等が一部のアイヌによって使用されるに至ったが、それらが一般に普及するに至ったのは明治以降のことであつた<sup>2)</sup>」。そして、鋤や踏み鋤を使わな

い所では、もうすこし別の農業が行われていた。<sup>(3)</sup> 若しそうだとすれば、今日、擦文文化の遺址からアワやヒエが出土し、<sup>(4)</sup> またはやくから所謂石庖丁も出土していて、北海道ではヒエ・アワの栽培が確実にこの時代にまでさかのぼり得ることが明らか<sup>(5)</sup>にされているが、それが手鋏や手鎌を使つての前うねたて、的な農業なのか踏み鋤を伴ううねたて、農業なのかは、目下のところ二様に考へるしかないのではないかと思われ。資料を提供して下さり、また議論して下さい。また、埼玉県立博物館の大塚知義氏に心からお礼申上げたいと思う。

註

(1) KOTHE, Heinz, Das Hirsensesser im Furchenstockbau. OPUSCULA ETHNOLOGICA MEMORIAE LUDOVICI BIRO SACRA. Budapest 1959. pp. 319-69. 教授はここで北日本(アイヌ)・中国(華北)・スーダン・中部ヨーロッパ、とくにスーダンでの豊富な例証と出土遺物によって穂がりの所謂石庖丁や小鎌とうねたて、みぞほりのための踏み鋤型の農具との關係を論じ、また、それらに結びつくキビ・アワ・ヒエなどの栽培と脱穀法、儀礼などについてもより高次の農業としての犁農業の場合と対比している。みぞほりのための踏み鋤についてはキビのうねたて、農法、穂刈り鎌、(掘り棒のように下に)湾曲した打穀棒、それに聖数としての三などの要素が対応し、より新しい層としての犁の農業については、鉄の鍛造の技術(鋤や鎌の鉄の刃)、王者による収穫予祝の儀礼、土壘、聖数としての四などの要素が対応するという。

(2) 林善茂教授「アイヌの収穫・貯蔵技術」(『北方文化研究

報告』第一四輯)三、七、一八頁。穂がりをするのは婦女子の仕事で、摘んだ穂はサラニップ(肩にかけている袋)にいれ、家の入口の庭で干し、トッタ(ぶこ)につめ、倉にいで貯える。こうした穂がりの方法はアワについては本州でも後々まで行われていた。岩手のヒエの場合には根がりしてきて、オガラミ(ウスガラミ)といつて、「稗束を振り上げ、逆にした白に叩いて、実を落す」(高橋九一先生「稗づくりの民具と食制」『民具論集』3、四九頁)。ただし根がりの鎌は大き目の越前鎌か地元の農鍛冶の作った丈夫な鎌である(同上四八頁)。

(3) 林善茂教授「アイヌの耕耘技術」(『北方文化研究報告』第一三輯)一八六頁。それ以前の農業では掘りおこしやすい、手間のかからない場所をみつつけ、トイタヨッペ(耕起のための鎌)で草根もろとも表土を掻きおこし、サクシヤシッター(手鋏ただし木の枝)で根株を取除き、砕土し、木の枝でこしらえたこまざら、えて落葉や枯枝をかき集め、うねだて、せずに種を播く。これはHahnのいう最も古

い耨耕の段階だと教授は指摘される。この種の草刈り鎌、または小さな手鎌を使う畑作りは、実はなかなかの曲者なのである。その位置づけについても、スキによるうねたて農薬との係りあいについても、いまのところ明らかではない。

(4) 所謂石庖丁には、打製で両側に打ち欠きのあるもの、磨製長方型、同半月形直線刃型、同半月形外彎刃型、紡錘型の五つの基本型に分けることができるという(石毛直道氏「日本稲作の系譜——石庖丁について——」下『史林』五一巻六号、九九頁)。そして「北九州では、弥生式時代最古の時期より、すでに、半月形外彎刃二孔が出現することが確められる。この型式は北九州弥生式時代の前期に盛行し、中期になってもその伝統をたもつ」(同上二〇七頁)。そして「畿内では、前期には半月形外彎刃の型式も見うけられるが、中期になると半月形直線刃のものが盛行する」(同頁)。「東海・関東地方では石庖丁をほとんど出土せず、他の道具で収穫が行われたことを思わせる」。「東北地方の仙台および福島平野で、北九州とおなじ半月形外彎刃の形態があらわれるのは、興味深い」。「このように、日本では短かい時期に、かなりの動的变化をとげているが、北九州の半月形外彎刃の形式が、稲作の伝来とともに入ってきた大陸とつながる日本最初の石庖丁であることは、時期的にも、また他の文化要素との関係においても支持される」

踏み鋤の二系列(中村)

(同上二〇八頁)としている。半月形外彎刃は日本以外では朝鮮半島、遼東半島、揚子江の下流域、台湾などにみられ(同上二〇六頁)。かなり微妙な分布を示している。そして北海道では半月形外彎刃の型が発見されている。この点について林教授は次のように述べておられる。「粘板岩製の半月形もしくは長方形の扁平な磨製石器が出土している。一方の側に刃がついていて、反対側の背の部分に近く一つもしくは二つの小孔があげられている。材料及び形態上からいって、本邦の弥生時代における石庖丁と全く同系統のものであって、おそらくその影響によるものであり、当然穂摘の用具として利用されたものと考えられる。その分布は本道の西南地方に限られ、北は焼尻島、東は室蘭までで小樽附近が略々その北限線上にあり、積丹半島からは完形品が発見されている」(アイヌの収穫・貯蔵技術)前掲一九、二〇頁)。「しかし石庖丁とピバとの関係が明らかでないばかりでなく、石庖丁そのものの年代も単独出土で伴出物がないため不明である」(同上二〇頁)。

(5) 七年前のある座談会で、桜井清彦教授は次のように述べておられる。「擦文になると、堅穴住居にカマドが築かれているところからみても、農耕の存在を予想させています。事実、比較的新しい型式の擦文土器を出す堅穴から、アワ・ソバ・緑豆などが出ていますね」。「アワ・ソバなどを出した同じ堅穴から織物の遺物が出土しています

ね、現在は札幌の図書館にひっそりとおいてあります」（『北海道考古学の現状と課題』『民族学研究』二六卷一  
号、一〇頁）。サロベツ川の本流と支流との合流点の東南  
に面した丘陵上にある擦文の豊富遺址では鉄の小刀・刀  
子・斧・鉄片・紡錘車・繊維の炭化したものが出土した  
が、別に「豊田・近田両氏によれば植物性繊維の炭化した  
もの（織物、編紐、蓆、魚網）など一四種を発掘したと伝  
えている。また農作物の種子としてあわ・そば・緑豆が発  
見されており注目される」（児玉作左衛門・大場利夫教授  
「天塩国豊富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』  
一四輯、一七八頁）という。いっぽう擦文の遺址からは草  
刈りや根刈りにも使えそうな鉄の鎌が出土している。ある  
北海道式古墳・土墳は方形に近い楕円形の平面で「南西隅  
には、直径二〇センチで半月形の袋状ピットがある。この  
ピットには甕の底部が入れられていた。遺物は、ピットの  
南半分からまとまって出土した。甕・坏・刀子・鎌・鍬・  
針そして土玉三個である」（高橋正勝編『柏木川』北海道  
文化財保護協会七一年刊、一六頁）。この鍬の遺物（いや、  
ひょっとしたら鋤の遺物かもしれない）は幅三、四センチ  
のU字状の刃で、幅三センチの鎌の刃は、ちょうど鍬のな  
かに組合さったような形で発見されている。また、余市川  
の川口の擦文の古墳からはやはり鉄の鎌が発見されてい  
るが、この鉄の鎌の遺物は「基部側のみが残っている不完形

である。基部に折り返しがあるが、側縁全部を折り返  
えして、上方から中央まで斜めに折り返している。  
基部のみで大部分を欠損しているので判然としないが刃は  
内彎するものようである。重要なことは、木柄が鎌の部  
分のみではあるが残置していて、これによれば斜めに着裝  
され、しかも柄の中央に割目を作出して挿入していること  
が解る。柄の材質はスギである」（峰山・金子・松下・竹  
田氏『天内山』余市町教育委員会 七一年刊、五四頁）と  
いう。これらの土墳の副葬品？がそのまま当時一般に使わ  
れていた農具であるかどうか、アワヤソバの栽培と結びつ  
くかどうかには問題があるように思われる。むしろ鍬と鎌  
とのとりあわせは意味ありげである。しかし「擦文文化に  
ともなう鉄器の分布は千歳、恵庭町、江別市を結ぶ線、す  
なわち石狩低地帯にのぞむ丘陵上に集中している」（桜井  
清彦教授「古代北海道における鉄器について」『史観』第  
七五冊、九頁）。そして、この鉄器の流入はその出発点を  
東北地方の北部に求めることができるという（同上同頁）。  
これに対して「近世アイヌの鉄器は擦文文化のそれにくら  
べて種類も多く、数も豊富である。各種の刀剣類をはじめ  
鋸、槍先、鍬、鉤、鍋、鎌、鍬などがあるが、そのほとん  
どは本州との交易によって得たものであり、アイヌにとっ  
て鉄器は貴重品であり、高価なものであった」（同上）  
〇、一一頁。

